

SCS コミュニケーション

The Way Forward

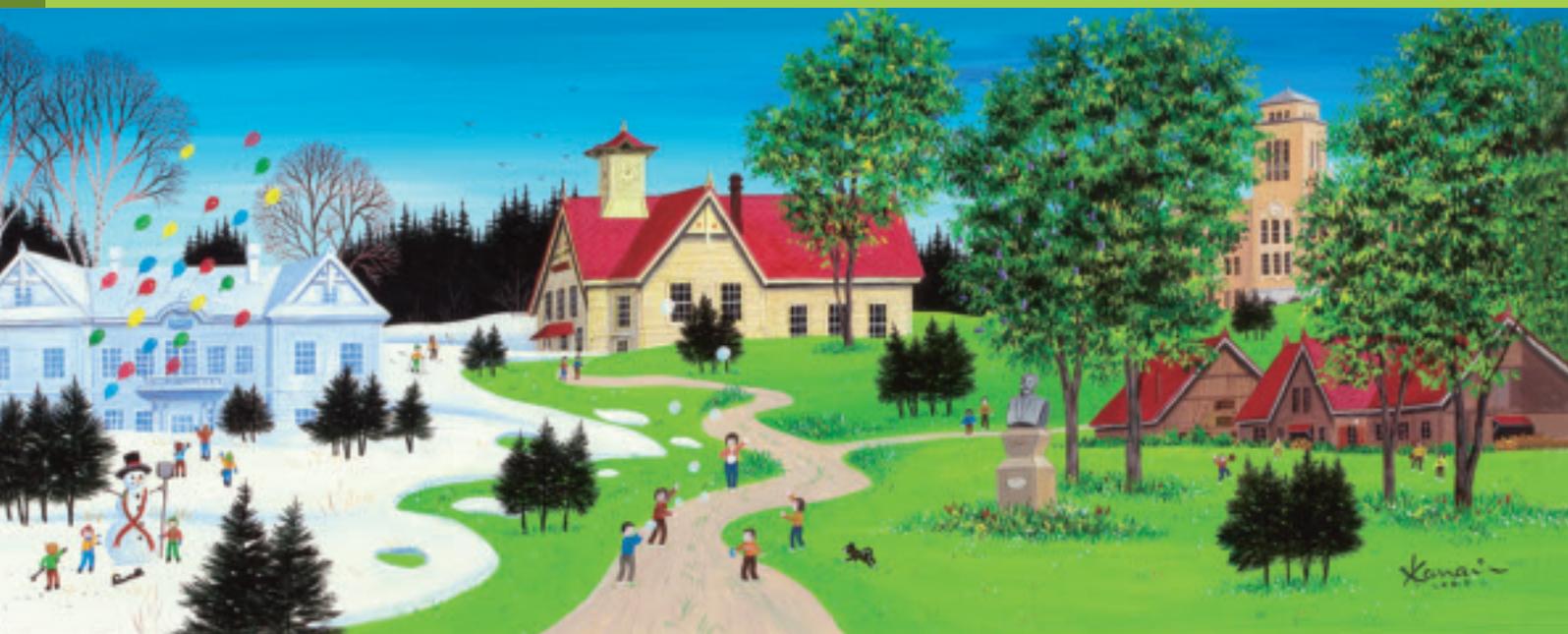
Communication with the Sapporo Cancer Seminar Foundation

2012

6月15日

1

Since 1981



「がん」の問題を解決するため、
様々な活動をしています



内閣府所管公益財団法人

札幌がんセミナー

〒060-0042

札幌市中央区大通西6丁目 北海道医師会館6階

TEL : 011-222-1506 FAX : 011-222-1526

E-mail : scs-hk@phoenix-c.or.jp

HP : <http://scsf.info>

The Way Forward no. 1

概要	2	がん啓発・予防事業	
SCSコミュニケーション発刊によせて	3	がん特別セミナー	18
国際がんシンポジウム	5	がん相談	20
冬季がんセミナー	8	がん拠点病院	22
エッセイの広場	12	ご寄附の御礼	23
海外における調査研究事業	16	財団の理事・評議員	26
		事務局紹介ほか	27

札幌がんセミナーの主な活動内容

1

札幌国際がんシンポジウムの開催
がんの基礎分野における研究

1981年以降、毎年6月～9月にかけて開催。多くのがんの基礎研究分野における国際的エキスパートが札幌に集合し、最新の知見の発表を行います。

また、若い研究者も多く参加され、シニアの研究者とリラックスした友好的なムードの中で、がん研究について議論を交わします。それらの議論によるインスピレーションで、多くの重要な業績が生み出されています。(5～7ページ)

2

札幌冬季がんセミナーの開催
がんの臨床・社会的分野の研究

1987年以降、毎年2月のさっぽろ雪まつりの期間中に開催。

主として国内の研究者により、がんの臨床・社会的分野における様々な研究発表が行われます。臨床研究としての最先端のがん医療についての発表や、がん患者さんや、ご家族の生活についての発表など、がんの抱える社会的問題についての研究発表も行われます。(8～11ページ)

3

海外における調査研究事業
海外での健康教育開発支援
海外における学術調査研究

世界の学者や研究機関と協力し、がんによる死亡の実態調査や生活習慣病とがんとの関わりについて、アジア、アフリカ及びオーストラリアに於いて現地調査による情報の収集、整理を行っています。

また、アジア等の発展途上国における生活習慣病の問題に取り組むため、スリランカにおいて10年余にわたり、調査研究と共に健康教育を実施しています。(16、17ページ)

4

がん啓発・予防事業
市民に対する特別セミナーの開催
面接によるがん患者・家族との相談

がん啓発・予防事業としてのセミナーを開催し、市民の方のがんに対する理解を深めていただくと同時に、予防についての知識の普及にも取り組んでいます。(18、19ページ)

また、がんの患者とご家族の方のために「面接によるがん相談」を1991年4月より実施。これまで1,000件を超える相談を受けています。(20～21ページ)

SCS コミュニケーション発刊によせて



札幌がんセミナー創設の頃

杉村 隆
日本学士院幹事／国立がん研究センター顧問

1979年(昭和54年)8月、ゴードン・カンフェレンスに出席していた。ニューハンプシャーのコルビー・ソイヤーズという小さい町である。女子大学の寮が夏休みで、安価に泊まれた。美しい芝生に囲まれ、体育館の様な所で、数人のスピーカーの問題提起を元にして、議論を展開する。

午後は適当に自由時間もあり、テニスをしたり、近くの湖を観光船で楽しんだり、三々五々、自由勝手に過ごす。つまり、自然の中で開放的な雰囲気の下、新鮮ながんの科学を学び合う機会である。友人を作り、お互いの業績の理解も深めた。日本にもこのような機会があれば良いが、と思った。故伊東信行教授が、研究室仲間を中心に、実験病理学の3日くらいの小さい集会を、毎年信州穂高の谷間のロッジで行っていた。学問・自然・友情の会で、どこか少しゴードン・カンフェレンスに似ていた。

本格的に日本でこの夢を実現できるのは、北海道しかない。実行しそうな人は、永年の友人 小林 博教授しかいないと思った。一枚の絵ががきをコルビー・ソイヤーズから小林先生に書いた。たまたま先生も心中密かに同様の夢を持ってお

られた。私は、広い北海道の中に、コルビー・ソイヤーズ風の所があるかと思った。

しかし北大のある札幌が現実的であり、サッポロ・セミナーが誕生。サッポロ・ビール、サッポロ・オリンピックに加えて3つ目のサッポロが外国人研究者の言の葉に乗るようになった。北海道医師会長の山崎武夫博士の目立たない強力な支持も忘れられない。

小林先生の動きは速く、1981年(昭和56年)に第1回が行われ、今に続いている。夏の涼しい札幌で、当初からクライン、フィドラー、ミヒチ等の諸博士等も積極的に参加した。一夕、郊外のペケレット湖畔で食事をしたり、サッポロ・ビールの工場でジンギスカン料理(羊)をたらふく食べたりした。

小林先生は、第1回より、あますことなく毎回の記録を英文でがん・リサーチ、がん・サイエンス等に発表されている。サッポロ・セミナーが国際的にがん研究に貢献したことは大きい。更に、小林先生は後年、がん臨床主題の冬のサッポロ・セミナーを雪まつりの頃行われている。

太平洋を越えた一枚の絵はがきは、小林先生の心にあつたものを刺激したにすぎない。

振り返ると、2、30年前の日本全体は明るい希望に溢れていた。がん研究者は、科学を今の数倍楽しんでいたらしいことにも気が付いた。



札幌がんセミナー創設30周年に寄せて

菅野 晴夫
公益財団法人がん研究会顧問



この度、札幌がんセミナー創設30周年の記念すべき年を迎えられたとお伺いいたし心よりお祝いを申し上げます。

札幌がんセミナーは国際がんシンポジウムと冬季がんセミナーの2つを毎年開催されておられ、その内容は高度かつ先端を行くものと、内外から高い評価を与えられています。これは偏に小林博先生を中心とする関係の方々の高い志と堅いチームワークによるものとそのご努力に改めて敬意を表する次第です。

今年の1月、国立がんセンター設立50周年記念式が東京であり多くの人々が参会されました。天皇・皇后両陛下がご出席になられ、天皇陛下がおことばをお述べになられました。その中に、私もがんを持つ一人ではありますが、多くの人々ががんの脅威から解放される日が早く来ることを望んでおります、とありました。私共は深く感銘をいたすと共に、重く受け止めさせていただいたところであります。

この時、私はまた、昭和47年、国立がんセンター設立10周年記念会のことを思い出しました。当時は吉田富三先生がご存命で、先生は国立がんセンターの会には出席さ

れず、同日集会の北大癌研10周年の会に出席されたことです。「小林博君との約束が早かったからな」と小林先生との約束を守られたのでした。あの頃、吉田先生はお体の具合がかなり悪かったのでお止めになってはと申し上げたのですが、いや約束は守りたい、小林君らの仕事も知りたい、と言われて札幌に来られたのでした。

あの頃は、がんの本態も治療も余り分らず基礎と臨床は一生懸命でした。あれから40年たったいま、がんは治るがんになり、がんの薬も続々開発されています。また、患者さん、家族、社会ぐるみでがんに取り組んでいます。このような時、札幌がんセミナーに、がん克服への新しい道をお示ししたいと思っております。

札幌がんセミナーの益々のご活躍を期待しております。



貴財団におかれましては、公益財団法人に移行をされて以来、益々発展のご様子、心からお慶び申し上げます。

またこの度は、新たに会報を発刊されますとのこと誠に有意義なことと存じ、心からお祝い申し上げ、ご努力に対し深く敬意を表します。

2010年11月半ばの頃だったと思いますが、小林先生から、「今日札幌がんセミナーの公益財団法人への移行が認められた」と喜びの電話をいただきました。私が高松宮妃癌研究基金の理事長に就任した2008年は、旧財団の基礎となっていた民法が110年振りに改正され、同時に公益法人制度の改革に関わる新たな法律が施行された年であり、私の財団事務局は公益財団法人への移行認定の申請業務に忙殺されておりました。こうした事務局の苦勞を目のあたりにしていましたので、或る日、先生に「新しい法律に則り公益移行を目指すのであれば、早い機会に所轄官庁である北海道庁と相談するのがよい」とお薦めしたことがありました。上述の小林先生からの「喜びの電話」は、私の余計なお節介に対して感謝して下さったものと思っています。

会報発刊のお祝い

高山 昭三

公益財団法人高松宮妃癌研究基金理事長／財団法人がん研究振興財団理事長



小林先生は1991年、北海道大学を定年退官されると共に財団法人札幌がんセミナー理事長にご就任され、早いもので本年で21年目を迎えられました。

その間、がん制圧を目途として、毎年、国際シンポジウムやさっぽろ雪まつりと同時期に開催される冬季がんセミナーなどユニークな事業を展開してこられました。

ご存知のように我が国では、2人に1人ががんに罹り、3人に1人はがんで亡くなる時代を迎え、重大な社会問題となっています。そのような背景を踏まえ、札幌がんセミナーの活動で特に注目したいのは、がんの啓発・予防に関する事業であります。

小林先生の広範な研究分野の中で一貫している一つの流れに「がん予防」があります。がんの予防は、先生が「がんの予防」新版(岩波新書)にもお書きになっておられるように、アカデミズムだけにとらわれず、研究目的意識をもった実学的アプローチするべき最も基本的で重要な研究課題だと思います。私も全く同感であります。

新しい会報の発刊を機会として、公益財団法人札幌がんセミナーが今後一層のご発展を遂げられますよう祈念してお祝いの言葉と致します。



未来を見据えよ

北島 政樹

国際医療福祉大学学長／慶應義塾大学名誉教授

札幌冬季がんセミナーは、1987年、第1回が開催され本年で26回と輝かしい歴史と伝統を築いてこられた公益財団法人札幌がんセミナー小林博理事長に敬意を表する次第であります。当時私は杏林大学第一外科助教授として急性胃粘膜病変の病態生理と共にMNNG発癌や抗癌剤の研究に従事し、日本癌学会や日本癌治療学会で発表をさせていただいておりました。

小林博先生は両学会の指導的立場におられ、癌研究の先導者でもありました。先生の講演は常に将来の癌研究の指標を明確に示され、そのたびに慶應義塾創立者、福沢諭吉先生の言葉、「未来を見据えよ、今の為の今ではなく、未来の為の今」を思い出しておりました。

1991年、私が慶應義塾大学一般・消化器外科教授として戻ってから学会などでお会いするたびに常に励ましのお言葉をかけてくださいました。

先生は常に癌臨床・基礎研究の動向を国内のみならず、国外までの確に洞察され、がんセミナーではその時のトピックスを決められ、演者を選考されている事がプログラムで推察する事が出来ました。当時、教室の池田正君(現帝京大外科主任教授)や久保田哲朗君(元慶應義塾大学包括

先進医療センター教授)を演者としてお招きいただいたことに感謝いたしておりました。

セミナー開催後、26年の間に癌の臨床・基礎研究が飛躍的に進歩いたしました。未だ100%根治とは云えません。

小林先生は癌の完全撲滅を目指されておられますが、先生の若々しい癌研究に対する情熱と停まることのない scientific mind に敬意を表すると同時に札幌がんセミナーから世界に向けてのがん研究成果の発信を今後も期待いたしております。



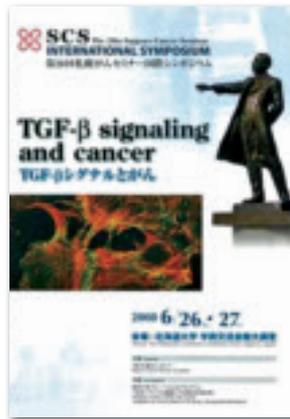
札幌国際がんシンポジウム

気候の良い夏の札幌で毎年開催される国際シンポジウムは、今日まで30年を超えております。

毎回、海外から10数人の研究者を招いて、総勢100人前後の専門家の参加で開催されるこのシンポジウムは、我が国の若手研究者に貴重なチャンスを与えてきたといえます。

シンポジウムの内容については、常に重要なテーマを時勢に「先取り」した形で、その分野の国際的な研究者を日本に招いて討論するというもので、得られた効果や刺激は大きかったと感じられます。また、この国際シンポジウムに参加したのが縁で、外国留学した日本の研究者もたくさんおられます。

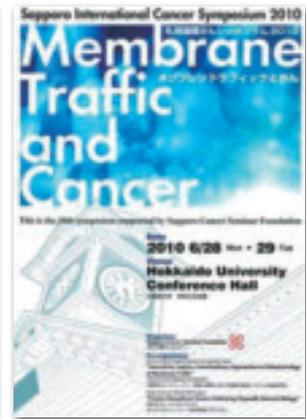
1981年に開かれた第1回シンポジウムでは当時では新しかった「がんの免疫逃避」というテーマが検討されたのですが、その後数年間、国内でも海外でもこのテーマはがん研究の主要なテーマとして研究が続けられた分野になったことは関係者がみな知っていることです。



2008



2009



2010

2回目、3回目に取り上げられた「がん化と細胞膜面の生化学的変化」、「がん化学療法における生体反応の役割」もその後国際的にみても重要な研究テーマになりました。

シンポジウム開催初期の頃は、上に述べたように、「がんに関する基礎研究」を主題に取り上げて来ましたが、最近では臨床的なテーマも取り上げられるようになりました。テーマ選択は今も「先取り」のポリシーを大事に行われています。(細川眞澄男)

2012 国際がんシンポジウムのご案内



代表世話人 白土 博樹
北海道大学大学院医学研究科
放射線医学分野教授

札幌がんセミナー創設者の北海道大学の名誉教授小林博先生は、お仲間とともに、1981年、31年前(私が北海道大学医学部を卒業した時)からこのシンポジウムを毎年開催されてきました。その後毎年、本質的で純粋な科学的問題を若い科学者とリラックスしつつ、友好的な雰囲気の中で議論してきました。

癌に対する放射線効果には、まだ我々が答えを知らない多くの謎があります。どの放射線治療装置も人類に対する完全な治療装置にはまだ達しておらず、さまざまな種類の装置がお互いの優劣を競っており、国際的な標準を決定すべき状況にあります。札幌国際がんシンポジウムのフランクな雰囲気は、お互いに友情を芽生えさせ、参加者全員の心を開いて、人々にインスピレーションを与えるでしょう。

7月初旬の北海道、札幌は、通常は心地よい季節です。どうぞ、会場にはフォーマルスーツ等より、カジュアルな

装いでお越しください。そして、講演者にはたくさんの質問をしていただき、躊躇せずにご自分の意見を発表してください。私は、そうすることが、この輝けるシンポジウム創設者への尊敬の念を真摯に表す方法であると思っております。

このシンポジウムに引き続き、7月24日午後、もうひとつの会“最先端研究開発国際セミナー(International seminar for Funding Program for World-Leading Innovative R&D on Science and Technology (FIRST Program))”を、最先端研究開発支援プログラムの一環として行います。このセミナーでは、政府からの基金に基づき、世界最先端の陽子線によるがん治療に関連したトピックスが話されます。お時間が許せば、当該セミナーへもご出席頂ければ幸いです。



2012

■ Brief history of the International Symposium on cancer

国際がんシンポジウムの歴史

2011年シンポジウムは東日本大震災のため中止

Date	Theme	Organizing Committee (*Chairperson)	Meeting Report / Publications	
1st Symposium July 15-18, 1981	Escape of Tumor Cells from Immune Controls	Baldwin Robert W. Klein George Tachibana Takehiko Kobayashi Hiroshi*	Hamaoka Toshiyuki Mihich Enrico Urushizaki Ichiro Cancer Research 42: 1608-1609, 1982	
2nd Symposium July 14-17, 1982	Membrane-Associated Alterations in Cancer: Biochemical Strategies against Cancer	Warren Leonard Tsuiki Shigeru	Fujii Setsuro Makita Akira* Cancer Research 43: 2322-2323, 1983	Gann Monograph vol. 29, 1983(JCA)
3rd Symposium July 13-16, 1983	Biological Responses in Cancer Chemotherapy	Fefer Alexander Mihich Enrico Sakurai Yoshio*	Kobayashi Hiroshi Wada Takeo Cancer Research 43: 6109-6112, 1983	Immuno-modulation by Anticancer Agents (Plenum Co., 1985)
4th Symposium Aug. 28-31, 1984	Viral Transforming Genes and Oncogenes: Origin, Structure, and Function	Rapp Fred Toyoshima Kumao Fujinaga Kei*	Vogt Peter K. Osato Toyoro Cancer Research 45: 2392-2394, 1985	
5th Symposium July 10-13, 1985	Monoclonal Antibodies: Progress in Cancer Immunobiology and Clinical Application	Reisfeld Ralph A. Hashimoto Yoshiyuki Takahashi Toshitada	Greene Mark I. Kikuchi Kokichi Yachi Akira* Cancer Research 46: 2193-2196, 1986	
6th Symposium July 1-4, 1986	Viruses, Immunodeficiency, and Human Cancer	Purtilo David T. Toyoshima Kumao Osato Toyoro*	Kobayashi Hiroshi Miwa Masanao Cancer Research 47: 918-921, 1987	AIDS Research vol. 2 Suppl. 1, 1986
7th Symposium July 8-11, 1987	Primary & Secondary Prevention of Cancer	Morrison Alan S. Kobayashi Hiroshi Saito Kazuo Aoki Kunio*	Hakama Matti Miyake Hirotsugu Tamura Ko-ichi Cancer Research 48: 4434-4436, 1988	
8th Symposium July 6-9, 1988	Cancer Progression & Metastasis	Fidler I. Josh Suemasu Keiichi Tarin David Urushizaki Ichiro Kobayashi Hiroshi*	Kerbel Robert S. Tachibana Takehiko Tsubura Eiro Yokoro Kenjiro Cancer Research 48: 4434-4436, 1988	Invasion & Metastasis vol. 9 No. 2 1989
9th Symposium July 5-7, 1989	Cell Differentiation and Cancer Control	Bloch Alexander Koeffler H. Philip Saito Masaki Takaku Fumimaro Hozumi* Motoo	Kobayashi Hiroshi Pierce G. Barry Tarin David Takeichi Noritoshi Cancer Research 50: 1346-1350, 1990	
10th Symposium July 6, 1990	Recent topics in Cancer Research	Ohsato Toyoro Makita Akira	Kuzumaki Noboru Kobayashi Hiroshi* Cancer Research 51: 745-747, 1991	
11th Symposium July 10-12, 1991	Molecules in Carcinogenic Processes	Harlow Edward Nishimura Susumu Osato Toyoro	Ikawa Yoji* Noda Makoto Cancer Research 52: 2362-2366, 1992	
12th Symposium July 14-16, 1992	Oxyradicals and Antioxidative Responses in Cancer	Taniguchi Naoyuki* Pickett Cecil B.	Nishimura Susumu Griffith Owen W. Cancer Research 53: 1-4, 1993	
13th Symposium July 6-9, 1993	Current Strategies of Cancer Chemoprevention	Wattenberg Lee W. Kelloff Gary Fujiki Hirota*	Boone Charles W. Kobayashi Hiroshi Cancer Research 54: 3315-3318, 1994	
14th Symposium July 6-9, 1994	Genetic Polymorphism and Cancer Susceptibility	Gonzalez Frank J. Kadlubar Fred F. Fujii-Kuriyama Yoshiaki Watanabe Minro*	Guengerich F. Peter Kato Ryuichi Kamataki Tetsuya Cancer Research 55: 710-715, 1995	
15th Symposium July 5-8, 1995	Psycho-Neuro-immunology and Cancer	Besedovsky Hugo O. Uchida Atsushi Herberman Ronald B. Zäker Kurt S.	Ozawa Nakaaki Azuma Ichiro Spielberger Charles D. Sendo Fujiro* Cancer Research 56: 4278-4281, 1996	Discussions on Future Directions in Psycho-neuroimmunology and cancer (Nishimura / Smith-Gordon)
16th Symposium July 3-5, 1996	Molecular Mechanisms for Inflammation-promoted Pathogenesis of Cancer	Hosokawa Masuo* Kobayashi Hiroshi Ohshima Hiroshi Sendo Fujiro	Kerbel Robert S. Maeda Hiroshi Parsonnet Julie Cancer Research 57: 3620-3624, 1997	



The First International Symposium on cancer held in the summer of 1981, its theme was Escape of Tumor Cells from Immune Controls

Date	Theme	Organizing Committee (*Chairperson)	Meeting Report / Publications
17th Symposium July 8-10, 1997	Cytoskeleton and G proteins in the Regulation of Cancer	Kuzumaki Noboru* Ben-Ze'ev Avri Takai Yoshimi Mori Michio	Stoszel Thomas P. Maruta Hiroshi Tsukita Shoichiro Hokkaido University Medical Library Series vol.37,1998
18th Symposium July 7-9, 1998	Regulation of Machinery for Cancer Cell Growth, Immortality, Apoptosis and Invasion	Niitsu Yoshiro* Derynck Rik Yuan Junying	Taniguchi Naoyuki Seiki Motoharu Nagata Shigekazu Jpn.J.Cancer Res. 90:1273-1276, 1999
19th Symposium July 7-9, 1999	Cancer Genomics and Molecular Diagnosis	Nakamura Yusuke* Kallioniemi Olli-P Perucho Manuel Ponder Bruce	Noda Tetsuo Ohki Misao Tokino Takashi
20th Symposium July 5-7, 2000	Gene-Environment Interaction and Cancer Prevention	Fraumeni Joseph F. Kitagawa Tomoyuki Hiroshi Kobayashi*	Mihich Enrico Tominaga Suketami Cancer Research 61: 2788-2792, 2001
21st Symposium July 4-6, 2001	Epstein-Barr Virus and Human Cancer	Kieff Elliott Sugden Bill	Takada Kenzo* Jpn.J.Cancer Res. 92:1352-1354, 2001
22nd Symposium August 3, 2002	Cancer Epigenetics	J. Issa Jean-Pierre Nakatani Yoshihiro	Kobayashi Hiroshi Imai Kohzoh*
23rd Symposium July 31-August 1, 2003	Immunology-based Targeting Therapy	Carbone David P. Reisfeld Ralph A.	Imai Kohzoh* Takahashi Toshitada
24th Symposium June 20-22, 2004	Pharmacogenomics in Cancer Chemotherapy : Recent Advances in ABC Transporters and Genome Analyses	Ishikawa Toshihisa* Sugimoto Yoshikazu Kamatani Tetsuya	Borst Piet Gottesman Michael M. Ling Victor Journal of Experimental Therapeutics and Oncology, vol.4, 253-257 がん分子標的治療 vol.2, No.4, p.79-81
25th Symposium August 2-4, 2005	Toward Personalized Medicine in Cancer and other Life-style Related Diseases	Sendo Fujiro* Kawata Sumio Nakamura Yusuke Muramatsu Masaaki Matsushima Kouji	Cotton Richard Tsuruo Takashi Ratain Mark J. Kato Takeo Kubota Isao
26th Symposium July 22-23, 2006	Innate Immunity in Cancer and Infectious Diseases	Seya Tsukasa* Sawa Hirofumi Ayabe Tokiyoshi	Cattaneo Roberto Matsumoto Misako Cancer Science, Dec,2006,97(12), 1424-1427
27th Symposium July 12-13, 2007	Glycomics; New Perspectives in Cancer Cell Behavior	Taniguchi Naoyuki* Hakomori Sen-ichiroh Hollingsworth Michael A.	Narimatsu Hisashi Irimura Tatsuhiro Kannagi Reiji
28th Symposium June 26-27, 2008	TGF- β signaling and cancer	Miyazono Kohei* Derynck Rik Kato Mitsuyasu Itoh Susumu Imamura Takeshi Ishisaki Akira	Miyazawa Keiji Saitoh Masao Watabe Tetsuro Kano Mitsunobu Ehata Shogo
29th Symposium July 13-14, 2009	Helicobacter pylori and Gastric Cancer	Hatakeyama Masanori* Asaka Masahiro Tatematsu Masae Higashi Hideaki	Azuma Takeshi Chiba Tsutomu Kamiya Naoko
30th Symposium June 28-29, 2010	Membrane Traffic and Cancer	Yoshimori Tamotsu* Mostov Keith E. Ohno Hiroshi Okada Masato	Pfeffer Suzanne R. Sabe Hisataka Sasaki Takuya
31st Symposium July 23-24, 2012	Advanced Radiation Therapy and Cancer Research Up-to-Date	Shirato Hiroki* Hiraoka Masahiko	Sakurai Hideyuki Kamata Tadashi



The Thirty's International Cancer Symposium in summer 2010

札幌冬季がんセミナーの歴史

第1回 1987年2月4-5日

世話人：宮崎 保

テーマ：白血病細胞の生物学的特性とその制御

第2回 1988年2月3-5日

代表世話人：内野純一

テーマ：肝癌の生物学的特性とその制御

第3回 1989年2月2-4日

代表世話人：小林 博

テーマ：肺癌と縦隔腫瘍をめぐって

第4回 1990年2月8-9日

代表世話人：漆崎一朗

テーマ：癌とQuality of Life

第5回 1991年2月5-6日

世話人：井口 潔・内野純一

テーマ：がん治療の変遷と展望

第6回 1992年2月5-6日

代表世話人：阿部 弘

テーマ：脳腫瘍、頭頸部腫瘍の基礎と臨床

第7回 1993年2月6日

世話人：折茂 肇・小林 博

テーマ：老化とがん化の接点を求めて

第8回 1994年2月5日

世話人：垣添忠生・末舛恵一・兼元俊隆・小林 博

テーマ：難治がん対策はいかにあるべきか？

第9回 1995年2月10-11日

世話人：川上義和

テーマ：肺腺がん研究の最前線

第10回 1996年2月10日

世話人：小林 博

テーマ：2次原発がんとその予防

第11回 1997年2月7-8日

世話人：加藤紘之・犬山征夫・斎藤政樹

テーマ：いまがんを考える

—診断、治療そして予防

超音波装置(エコー)を用いたがん診断の実際とコツ、臓器機能の温存と生存率の改善、栄養とがん

第12回 1998年2月6-7日

世話人：今井浩三・平田公一・田村浩一

テーマ：いまがんを考える

—診断、治療そして予防

遺伝子診断と早期診断の最前線、消化器がん治療成績の向上を目指して、がん予防と将来展望

第13回 1999年2月5-6日

世話人：阿部庄作・工藤隆一・加藤紘之

テーマ：いまがんを考える'99

—診断、治療そして予防

診断トピックス、治療トピックス、予防トピックス

第14回 2000年2月11-12日

世話人：藤堂 省・細川正夫・井上勝一

テーマ：いまがんを考える2000

—その新たな挑戦

診断・治療トピックス、予防トピックス

第15回 2001年2月10-11日

世話人：井上勝一・荻田征美・岸 玲子

テーマ：いまがんを考える2001

—予防・診断そして治療戦略

微小転移の診断と治療、治療の最新トピックス、予防トピックス

第16回 2002年2月9-10日

世話人：平田公一・加藤紘之・岸 玲子

テーマ：いまがんを考える2002

—予防・診断そして治療戦略

がん治療の進歩I、がん治療の進歩II、がん医療の問題点

第17回 2003年2月8-9日

世話人：秦 温信・平田公一・岸 玲子

テーマ：いまがんを考える2003

—予防・診断そして治療戦略

第18回 2004年2月7-8日

世話人：細川正夫・阿部庄作・長嶋和郎

テーマ：いまがんを考える2004

—予防・診断そして治療戦略

第19回 2005年2月12-13日

世話人：晴山雅人・細川真澄男・井上勝一

テーマ：いまがんを考える2005

—予防・診断そして治療戦略

第20回 2006年2月11-12日

代表世話人：平田公一

テーマ：いまがんを考える2006

—放射線治療、外来化学療法を中心に放射線治療の進歩・外来化学療法の登場

第21回 2007年2月10-11日

代表世話人：細川正夫

テーマ：いまがんを考える2007

—補助化学療法の進歩、わが国におけるがん医療の将来

第22回 2008年2月9-10日

代表世話人：井上勝一

テーマ：いまがんを考える2008

—変わるがん医療・変えようがん医療

第23回 2009年2月7-8日

代表世話人：近藤 哲

テーマ：いまがんを考える2009

—がん治療最前線—

第24回 2010年2月6-7日

代表世話人：西尾正道

テーマ：いまがんを考える2010

—診断学の進歩によるがん治療の新展開—

第25回 2011年2月12-13日

代表世話人：高後 裕

テーマ：いまがんを考える2011

—高齢化社会・疾病予防社会におけるがん医療

第26回 2012年2月11-12日

代表世話人：福田 諭

テーマ：いまがんを考える2012

—最先端のがん医療をめざして—

第27回 2013年2月9-10日

代表世話人：秋田弘俊

テーマ：いまがんを考える2013

—個別化治療、医療経済をめぐって

札幌冬季がんセミナーの特徴

第26回目をこの2月に開催した冬季がんセミナーには、延べ人数にすると毎回400人ほどの参加。夏の国際シンポジウムに比べて参加者が多いのは、冬のセミナーは完全にオープンにしていること、また臨床的話題が多い為であろう。参加者は臨床医のほか薬剤師をはじめとするメディカルスタッフのがんの治療に関わる広い分野の人達である。

第27回(2013年2月)の開催予定

第27回札幌冬季がんセミナーでは、がんの個別化治療と医療経済の問題を取り上げる予定。現在、がんの鍵になっている特定の分子をピンポイントで標的とする薬(分子標的治療薬)が登場して、がんの個人差を克服し、ひとりひとりの患者さんにもっとも効果の大きい治療を提供する個別化治療が普及しつつあり、もっともホットな話題です。分子標的治療薬はとても高価ですが、個別化治療は効果が高い治療、患者ニーズに合った治療の提供につながり、社会全体の医療費減少にも貢献できるものと期待されます。一方、医療経済の問題も取り上げます。

○第27回 札幌冬季がんセミナー開催予定

会 期：2013年(平成25年)2月9日(土)～10日(日)

会 場：ロイトン札幌(札幌市中央区北1条西11丁目)

テーマ：いまがんを考える2013

個別化治療、医療経済をめぐって

代表世話人：秋田弘俊

(北海道大学大学院医学研究科腫瘍内科学分野 教授)

主 催：公財・札幌がんセミナー、大鵬薬品工業

登 録：登録料無料、事前登録不要

問合先：札幌がんセミナー事務局

TEL(011)222-1506

Email: scs-hk@phoenix-c.or.jp



札幌冬季がんセミナー 2012

毎年開催される冬季がんセミナー。2012年2月11日、12日の二日間にかけて開催され、多くの興味深い研究の成果が発表されましたので、一部の発表の概要をご紹介します。



Robotic Thyroid Surgery (ロボットによる甲状腺手術)

(演者) Tae Kyung
ソウルHanyang大学教授

第26回札幌冬季がんセミナーの代表世話人を仰せつかり、特別講演として、ロボット手術(ダビンチ)導入に非常に盛んである韓国からソウルHanyang大学Tae Kyung教授をお呼びして「ロボットによる甲状腺手術」についてご講演頂きました。

甲状腺手術は通常頰の真ん中下部(胸骨という骨の上)に切開をいれて行うのが今までの一般的な手術法でした。Tae Kyung教授は腋下から内視鏡とロボット操作できる器具を挿入し、光学系の進歩に伴う非常に明るく良い視野のもとに安全で確実、そして頸に傷の入らない手術が可能であるという内容を講演されました。

韓国ではロボット手術器具が既に40の施設で導入され、いろいろな分野で応用されているようです。一方でコスト面、患者さんへの保険請求、機械自体の手術野での操作な

ど、まだまだ解決しなければならない課題も示されました。

今回の発表に限らず外科手術の流をみると、例えば、おなかの手術を例にとっても、大きく切開して摘出する開腹手術から、内視鏡下手術、ロボット手術、ナビゲーション手術、ナノサージェリーなどへとキーワードがどんどん変化してきています。こうした新しい流れに、医療者(外科医)、医療機器メーカー、行政などがチームとなり、より患者さんに優しくそして安全・確実な手術にむけて、努力することがますます求められてくる時代になってきたことを感じさせる素晴らしい講演でした。



福田 諭
北海道大病院病院長



肺がん分子標的治療の最先端—個別化医療に向けて— (近畿大学腫瘍内科部門、中川和彦教授)を聴いて

(演者) 中川 和彦
近畿大学腫瘍内科部門教授

近畿大学腫瘍内科部門の中川和彦教授が、肺がんの薬物療法の歴史をひも解きながら、最新の分子標的治療薬による個別化治療について講演されました。

主なポイントを挙げますと、ゲフィチニブという分子標的治療薬が登場したことによって、1)肺がんは遺伝子の病気であることが臨床的にも明らかになり、2)上皮成長因子(EGF)受容体遺伝子という遺伝子の変異によって発生した肺がんではEGF受容体をピンポイントで標的とするゲフィチニブがとくに効果的であることが示され、3)EGF受容体遺伝子の変異がある肺がんの患者さんを対象としてゲフィチニブを用いて治療するという個別化治療によって、患者さんの生存期間が著しく延長することが臨床試験という研究で証明されて、実地診療においても標準治療として広く普及していることを述べられました。さらに最近、EML4-ALKという新しい遺伝子異常が肺がんで見られて、この遺伝子異常を持つ肺がんでは、ALKをピンポイントで阻害する分子標的治療薬のクリゾチニブという薬がとてもよく効くことも紹介されました。

現在、肺がんの遺伝子変異を目じるし(バイオマーカーといいます)にして分子標的治療薬を選択する個別化治療

が加速していて、従来の抗がん薬による化学療法では治療が難しかった肺がんにおいても、薬で効果が期待できる時代を迎えつつあることを実感させられる講演でした。



秋田 弘俊
北海道大学大学院医学研究科腫瘍内科学分野
北海道大病院腫瘍内科教授



佐藤昇志さんの「癌と免疫の話」

(演者) 佐藤 昇志
札幌医科大学医学部病理学第一講座教授

ヒトでは体内に発生する癌細胞に抵抗する「免疫機構」があることは古くから知られ、その機構を利用してがんを予防したり治療したりする研究や試みが行われてきています。札幌医科大学の佐藤昇志さんは、この分野で基礎研究から臨床応用まで広い視野に立った研究を実践されています。今回のお話しの中で、癌に対する免疫機構の解明、診断や治療に繋がる抗体の開発、がん細胞に対する免疫療法の進歩に関して、北海道の研究者がいかに多くの仕事を成し遂げてきたかを、地元先人の業績を振り返りながら、丁



寧に解説し、参加した多くの方々にあらためて感銘を与えました。

また、ご自身の最近の研究をわかり易く紹介いただきました。とくに、ご自身が一貫して癌細胞に特異的な抗原を探す努力を続け、いくつかのペプチドを見つけたこと、それを今、癌患者さんの治療で実際に使用を始め、手ごたえのある患者さんがおられることを、実例をもって示されるとともに、今後は、がんのもととなる「癌幹細胞/癌起始細胞」が重要であることを、ご自身の研究成果をもとにお話しされ、多くの聴衆の感銘をうけました。札幌がんセミナー理事長である小林博さんは、この分野での世界における先駆者のお一人で、その後、多くの仲間が続いていることを改めて実感した次第です。



高後 裕
旭川医科大学医学部内科学講座
消化器・血液腫瘍制御内科学分野教授



子育て世代のがん医療

(演者) 藤井 あけみ
北海道大学病院腫瘍センター助教
チャイルドライフスペシャリスト

身体的な痛みだけでなく、精神的な痛み、経済的な痛み、そして日本語に訳しにくいのですがスピリチュアルな痛み、それら全ての痛みを合わせてトータルペインと呼んでいます。がん診療に携わってきた私にとって、このトータルペインの考えはとても大切です。身体に感じる痛みだけでなく、抗がん剤治療の不安、入院生活の不安、仕事のこと、家庭のこと、そんな心配や不安・苦痛と一緒に取り組んでいかなければなりません。

働き盛り・子育て世代の方々を診療する機会も増えてきました。患者さんの最も大きな苦痛は何でしょうか？自分の診療に対する不安はもちろんですが、時にはそれ以上に、子供達の学校・教育、今後の生活、一緒に語る未来、それらがこの先どうなるかという心配・不安の方が遙かに大きいこともあるのではないのでしょうか。

ましてや自分の病気をいつ・どのように子供達に伝えていくべきなのか。これまで多くの医療者はそんな苦痛があることは承知しながらも、患者さんへの診療を優先し、子供達や親子関係への取組には積極的になれなかったかもしれません。

今回講演いただいた藤井あけみさんは、チャイルド・ラ

イフ・スペシャリストとして北海道大学病院腫瘍センターに勤務されております。「パパやママががんになったら～子育て世代のがん医療のQOLを考える～」と題し、子供を持つがん患者さんの支援活動を紹介いただきました。患者さんにより寄り添って一緒に答えを見いだす診療に携わり、その活躍は大学病院の患者さんだけでなく、他の医療機関で診療されている患者さんにも及んでいます。この講演を通して、子供達も一緒に親のがん診療に参加してもらうこと、それにより子供達にも親であるがん患者さんにも良い影響があることを学びました。がん診療における有力なチームメンバーがまた一人増えた思いです。これからも益々のご活躍を期待して、藤井あけみさんの講演の一端をご紹介します。



磯部 宏
KKR札幌医療センター 腫瘍センター長



大橋教授によるQOLを加味した生存分析QALYの紹介

(演者) 大橋 靖雄

東京大学大学院医学系研究科生物統計学・疫学・予防保健学教授

第26回札幌冬季がんセミナー2日目では、大橋靖雄教授(東京大学大学院医学系研究科生物統計学・疫学・予防保健学)による「がん臨床試験デザインの新しい展開」というタイトルでの講演がありました。その中では、最近の分子標的薬の臨床試験について、主として効率的な研究デザインの紹介がなされました。

ところで、私が最も注目したのは、QOL(生活の質)を数量化した生存分析であるQALYの提案でありました。抗がん剤の使用の副作用によってQOLが著しく低下する場合がありますが、この解析方法を用いることによって、QOLを加味した生存分析を行うことができます。そして、QALYによる解析を活用した臨床試験を行うことによって、QOLの低下を招きにくい治療薬を有効として選択することにつながります。この方法では、5項目(移動の程度、身の回りの管理、ふだんの活動、痛み・不快感、不安・ふさぎこみ)からなるEQ-5Dという質問紙を用いて、ベースライン時、初回投与後6週、12週、24週、48週、72週と経時的にQOLの評価を行う。そして、問題なし1点、やや問題あり2点、重大な問題あり3点として数量化します。

講演では、この解析を切除不能進行膵癌の治療薬の臨床試験に応用したGEST Studyの結果が紹介されました。

この研究は日本と台湾でデータ収集が行われ、その結果、標準療法であるGEM単剤群に対して、QEM+TS-1併用群がQALYの解析で有意な有効性を示しました。これは、TS-1剤が比較的QOLの低下を招きにくいことによると思われる。大橋教授によると、この解析結果はASCO(American Society of Clinical Oncology)2011で発表され、現在、論文化を急いでいるところであるといえます。また、同様のデザインでの乳癌治療薬の臨床試験も進行中で、QALYによる解析が予定されているそうです。今後、この解析が普及するものと大いに期待されます。



森 満

札幌医科大学医学部公衆衛生学講座教授



低侵襲・個別化消化器がん治療の展開 北島政樹先生の講演について

(演者) 北島 政樹

国際医療福祉大学学長

北島政樹先生は、現在国際医療福祉大学学長をなされておりますが、それ以前は慶応義塾大学医学部医学部長をはじめ、非常に数多くの役職をもち、現在でも国内外の外科の指導者です。

今回の講演は、ハーバード大学およびマサチューセッツ総合病院(MGH)での留学時、外科医としてその後の進路を決めた経験が話されました。それらの施設とマサチューセッツ工科大学が非常に密接に共同研究をしていて、医工・産学連携など、医学と他分野との科学的な結びがその後の日本の外科学に重要であることを認識され、日本の外科をリードしております。

外科分野の進歩では、現在低侵襲として外科系手術の大きな流れとなっている鏡視下手術の研究や、不必要なリンパ節郭清を省く為のテクネシウム錫コロイドを用いたSentinel Node Mappingなど初期の段階からの研究について話されました。

注目されている医工共同研究の代表であるda Vinciも2000年から使用しており、私たちも、慶応大学のda Vinciを用いた食道癌手術の発表を聞いています医療の提供は各種専門職からなるチーム医療を行うための教育が必

要であり、医師、看護師をはじめ、学生時代から医療にふれるなどの教育の実際を紹介されました。先生は“日本から外科医がいなくなることを憂い行動する会”の副理事長をされており、医学生に外科の夢や素晴らしさについて、早い時期から関心を持たせる重要性を強調されました。



細川 正夫

社会医療法人恵佑会札幌病院理事長

1994年にご逝去された武市紀年先生によるがん治療についてのエッセイをご紹介します。



故 武市先生(左)

〈がん告知の優先順位〉

がんの告知は奥さんががんの場合はご主人に、ご主人ががんの場合は奥さんではなく、成人した息子さんにされることが多い。奥さんを避ける理由は、女性は感情的になることを心配するためらしい。

でも、ご主人ががんの場合、理由はともあれやはり奥さんに告知するのがもっとも自然ではないか？

〈死を刻む時計〉

交通事故や心筋梗塞のように突然やって来る死は、心の準備をすることも親しい者にさよならを言う暇もないからよくない。むしろ、がんで死ぬ方が命が尽きるまでの心の準備ができ、家族や親しい者に別れを告げる余裕があるからよいという。しかしこれは本当だろうか？がん患者は死を刻む時計の音を瞬時も忘れることができない。

〈患者の中の優等生〉

患者の鑑であるとか優等生であると言われる患者の多くは常に笑顔を絶やさず、多少の痛みは我慢し不平不満を言わない。

しかし、わずかな痛みであっても痛いと言えなかったため、病状が悪化し、手遅れになることも少なくない。

口うるさいと思われようとも気になる病状はこと細かに訴える患者こそが本当の優等生ではないのか。

〈奥さんちょっと〉

医師が病室のドアから顔だけのぞかせ、患者に付き添っている奥さんに「奥さんちょっと」と呼ぶ。悪い検査結果でも出たのではないかと、患者は不安である。医師のいう「ちょっと」は患者にとっては「ちょっと」どころではない。

医師の「ちょっと」した気遣いがほしいものだ。

〈Vサイン〉

鼻にチューブを入れられ、腕には点滴の針が刺され、ストレッチャーに乗せられた患者が看護婦に押されて手術場に向かう時、見送る家族になぜか皆一様にVサインを送る。そんなに心配するな頑張るからとの必死な思いが込められている。しかし、本当に欲しいのは医師のVサインである。



It's easy to become too emotional when it comes to Cancer

ニコルス ピーター
経営コンサルタント

がんについて意見を述べるのは易しいかもしれないが、事実について知ることは時として難しく衝撃的です。

私は北海道の日本海に面した岩内町にいる知人を訪ねる機会がありました。私が滞在したホテルの部屋の窓から見たのは「泊原力発電所」でした。私は窓からの風景写真をFacebookに投稿したところ、岩内周辺地域のがんの率が高いというコメントを受けました。

私はこの聞いたこともない情報に驚きながらも、事実を知りたいという衝動にかられました。しかし、誰にどのようにこの情報の真実を確かめたらよいのか？ 新聞や反対運動団体、政府の報告書までこの問題についてどこまで信用したらよいのかわかりません。そこで私は札幌がんセミナー理事長小林先生にお聞きすることに決めました。先生は、情報を信用することのリスクや特にそれが直接がん発症にかかわる確証がない事などをご説明されました。

そして先生は、私の疑問に対して回答を探すべく、熱心にお考えくださり、信用できる情報源として北海道健康づくり財団の関係者(札幌医科大学名誉教授三宅浩次委員長)に連絡をしてくださりました。

まもなく、過去10年間における北海道の主要死因概要の最新レポートをみることができました。そして、驚きの事実として岩内町と泊村は北海道において悪性新生物の死因が一番高いことがわかりました。また岩内町は心疾患でも死因が高いこともわかりました。

私は、レポートの数値が泊原発の影響であると断言しなかったのですが、そう決めることができないというのは辛かったです。さすがに学者である小林先生は、統計は客観的であり死因が泊原発と関係があるとは断言できず、そう結論付けるには追加調査が必要であることも説明され、私は先生の検証を改めて心にとめました。

先生の専門的知識に加え、病気と感情的な反応をきちんと切り離して事実を検証する先生の姿勢、情報提供に感謝致します。





「札幌がんセミナー」を思う

前田 浩

崇城大学 特任教授／熊本大学名誉教授

私はがんと微生物感染の研究に従事して50年近くになりますが、当初は、抗がん剤研究も、がん遺伝子の研究も10年～20年もすればペニシリンの再来のような画期的な戦果を期待したものであります。ところがどっこい、がんはそんな簡単なものではないことがわかってきました。がんは実に多面的、多様な問題を呈し、しかも我々人間自身の体の細胞の生存本能の故に生まれる、あるいは変身するという困った妖怪であります。それぞれの研究者の立場立場で、癌の問題は多様な姿でその本態や問題点が認識されているといえますが、がん研究の道のりはまだまだ遠い道のりと思われま

す。癌研究はそれ故に今までにない多面的なアプローチの重要性が認識されてきつつあり、その多様性・多面性を総合する対がん戦略が必要になってきていると思われま

す。例えば、緩和ケアのレベルアップとQOL(それだけで結構、延命する)の考え方や、タバコや食品に対するライフスタイルの改善などががん予防に対する努力は、トータルのがん死を少なくするという点では、大いに見るべき成果が上がっているといえます。

さらにまた困った方の問題では、最近頻用されている分

子標的薬に代表される超高額の制癌剤の薬価とその奏効率の低さ、それを高額医療のカテゴリー故に、ほぼ無料化していることの問題(税金による支出)、前立腺がんのPSAや乳がんのマンモグラフィ検査の有用性の適否も識者の間では問題点となっています。混合診療の禁止も、新薬開発の立場からは大きな障壁となっています。さらにまた近年、胃ろうの問題や、PETなどの偽陽性の問題も重要な問題で、これらはいずれも混合診療による柔軟な運用が考えられます。それらは直接的な医療行為に加えて、ライフスタイルや心の問題、さらにまた、医療政策や医療経済、ひいては国家の財政問題にも密接に関わります。米国のニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディシンは世界の医学界で最も権威ある週刊誌の一つですが、同誌では医療の財政問題が毎週のように取り上げられています。ひるがえって我国の医療関係者は、この問題を討論する場合はほとんどないと思います。

それらはともかく、これらの幅広い問題についても、今後の貴財団の果たす役割は際限がないといえます。終わりにあたり、札幌がんセミナー財団のこれまでの発展を祝し、今後益々のご発展を祈念いたします。

(平成23年度日本癌学会吉田賞受賞者)



血管なんか壊してしまえ!

浜田 淳一

北海道大学遺伝子病制御研究所
癌関連遺伝子分野准教授

といっても、全身に張り巡らされた血管ではありません。がん組織を育てるために新たに作られている血管(腫瘍新生血管)のことです。

がん細胞といえども、生存・増殖するためには血流を介した酸素や栄養分の補給が必要です。逆に、このルートを遮断してしまえば、がん細胞を兵糧攻めにすることができます。ひとつの血管内皮細胞は、5から50個のがん細胞を養っている計算になりますので、個々のがん細胞を標的とした従来の抗がん剤よりも血管を標的とした薬剤の方がより効果的な抗がん作用を発揮できるとの考え方もできます。また、がん細胞と異なり、血管内皮細胞をはじめ血管を構成する細胞は正常ですので、それらの性格は均一であり攻め易いとも考えられます。さらに、がん細胞でみられるような突然変異も少ないでしょうから、薬剤に耐性となる血管内皮細胞はおそらく出て来ないであろうと思われま

す。このように腫瘍血管を標的とするのは、理にかなった抗腫瘍戦略と考えられます。

実際、大学の研究室や製薬会社では、腫瘍血管を標的とした薬剤の開発が精力的に行われてきています。

開発された血管新生因子やその受容体に対する抗体薬や

キナーゼ阻害薬のいくつかは、臨床の場でも使われています。しかし、最近、腫瘍血管を標的とした治療にも問題点があることがわかってきました。ひとつは、ある血管新生因子を叩いても別の血管新生因子が働くようになる、もぐら叩きのような現象が起こることです。ふたつめは、血管を壊すことになるわけですから、酸素濃度の低いところができることになります。低酸素の状態はがん細胞をより転移しやすい性格へと変化させることがあります。また、腫瘍血管の内皮細胞にはいろいろな顔つきのものがあるようで、そのなかには阻害剤に対して耐性を示すものもあるようです。これらの問題を克服するために、血管新生阻害薬と抗がん剤の併用やそれぞれの投与のタイミングの検討、ならびに抗新生血管療法感受性を評価できるバイオマーカーの探索が行われています。抗腫瘍血管療法剤が両刃の剣から片刃の剣として活躍する日が待ち望まれます。

年甲斐もなく、フェイスブックなるものにはまっている。と申し上げても、フェイスブック(以下FB)のことなどご存じない方が多いに違いない。

ハーバード大学の学生だったマーク・ザッカーバードという青年が開発したいわゆるsocial network service(SNS)の一つで、インターネットを介して双方向の通信ができるシステムである。若者たちは昼食に食べたメニューの写真などを、FBで紹介し合って、交流を深めているようである。

まさか74歳の老人が昼食のメニューをFB上に紹介するはずもないが、はまってしまった理由は別にある。それは、3.11の東日本大震災に関係がある。

自分に何か出来ることがないか考えあぐねていたときに、大震災の2か月ほど前に北大時代の同級生の一人に聞いたこのFBに想いが到った。FBは他のSNSと違って実名を登録して、自分の写真を示して交流することが原則である。ネズミ講ではないが、「友達の友達は皆友達だ」というFBのシステムは、被災地の支援を広げていくには格好の道具ではないかと思った。

そして、「子ども支援フェイスブックプロジェクト」なるものをFB上に作った。つまり、FBに種々の子ども支援の

「フェイスブック」って何?

仙道 富士郎
老健施設みゆきの丘施設長
山形大学前学長



プロジェクト案を提案してもらい、優れたものから実施していこうとする計画である。

始めてしばらく経つが、ネズミ講のように会員が増えていくものでもないし、議論は盛んに展開されるが、実際実行するとなると、そんなに手が挙がるものでないことも分かった。

しかし、教え子の医師たち等からの過分の寄付もいただき、いまだに意気軒昂といったところではある。間もなく、英語版・スペイン語版の「子ども支援フェイスブックプロジェクト」もお目見えする。4月からお世話になっている老健の職員の方々の温かいサポートに包まれながら、プロジェクトのことに忙しく、動き回っている毎日である。

がんへの取り組みが変わってきた

小林 博
公財・札幌がんセミナー理事長



私は以前、がんは研究さえしっかりやれば解決すると考えていました。1981年から「国際がんシンポジウム」を始めることになり、そのような企画を懸命にやることでがんは解決できると信じていたのです。

ところが、がんで亡くなる方は身近にたくさんおり、そのような方々を私たちは手をこまねて見ている有り様でした。こんな時ほどがん研究者としての無力さを実感したことはありません。

そこで、がん対策は研究だけではないということから、がんの臨床的な問題に関わる話し合いをしようと、1987年から「冬季がんセミナー」が発足しました。

その間、研究も進み、がんの診断、治療についても非常に大きな進展がありました。

しかし、それでもなおがんで亡くなる方は多く、現在は毎年30数万人にまで増えています。来年も再来年も、同じような状態が続くと思います。

したがって、人間があの世界に旅立つことは避けられないとしても、まずがんになるまでの年齢を遅らせ(予防)、がんで亡くなる時までの年齢を遅らせること(治療)が大切だと思っています。

また死ぬまでの心身の苦しみを出来るだけ和らげてあげるといふ、いわゆる「ケア」への関心を持つことも大切であることに気付いたのです。

そのような背景を考えると、がんに対する私たちの取り組みも、ずいぶん変わってきたものだと思います。がんの研究者だけに任せていた時代から、がんの臨床家に、そして広い意味の医療者(介護、福祉)や、さらに今は一般市民を含めたみんなの力を結集しなければならない時代へと変わってきたのです。

幸い、私たちの財団は多くの皆様の友情に支えられて、小さくても自由な発想でのびのび思う存分その力を発揮できる状況にあると思います。研究や臨床(ケアを含む)も大事であり、また市民への啓発・予防も大切であります。

この意味で公益財団法人札幌がんセミナーは各界、各分野のみならず積極的なサポートをいただきながら、がんとの闘いを上手に発展させていきたいと念願するものであります。

どうかよろしく申し上げます。



日食マニア

浅香 正博

北海道大学大学院医学研究科がん予防内科

今年の5月21日、わが国で広範囲にわたって金環日食が観られ多くの人たちに感動を与えた。私も静岡まで出向いて金環日食を写真に撮ってきた。金環になると太陽の光量は明らかに減少したが、あたり一面が夕方のように暗くなる皆既日食とは明らかに差があった。宇宙飛行士の毛利衛さんは1963年7月、網走で皆既日食を観てからその信じられない光景に人生観が変わってしまい、気がつくや宇宙飛行士になっていたそうである。この時、私も皆既日食を見るため、網走郡美幌町に出かけていた。高校1年生の時であった。当日、朝日が地平線から上がった直後の午前4時14分より皆既日食が始まった。網走では美しいコロナやダイヤモンドリングを見られたのに対し30km離れた美幌ではその直前に突然雲がやってきて太陽を隠してしまい30秒しかない天体ショーは何が起こったかわからないまま終了した。つまり、毛利さんは見ることができ、私は見られなかったのである。感動した毛利さんは宇宙飛行士になり、感動を得られなかった私は医師になった。

2009年7月、わが国では46年ぶりの皆既日食を観るため屋久島に渡ったが、荒天のためまたもや観察することができなかった。めったにない機会を二度も逃がした衝撃は大

きかった。どうしても皆既日食を観たいという要求が大きくなり、2010年7月、南太平洋で観察された皆既日食に飛行機をチャーターし、雲上から観るツアーに参加した。午前8時27分とうとうその時はやってきた。急に辺りが暗くなり、真っ黒な太陽とその周りを光り輝いている美しいコロナを観ることができ夢中でカメラのシャッターを切った。5分もの持続時間があったため超望遠レンズの着いたカメラから目をずらしたところ、黒い太陽だけでなく辺りの景色も一望することができ超自然現象の真っ直中にあることが実感できた。終了直前には、ダイヤモンドリングの美しい輝きを観察できさらに感動が深まった。

すっかり皆既日食の魅力の虜となり、2030年までの皆既日食の日程を調べあげた。皆既日食ツアーをすべての予定に優先させ、残りの人生を楽しみたいと思っている。



がんに思う

猪俣 幸子

裏千家茶道教授

身近な人の死因は何といってもがんが多い。昨年は親友の夫が肺がんで亡くなった。同じ頃、義妹が大腸がんで逝ってしまった。人工肛門は着る物にも制約があり、女性としては同情した。それにも増して高額医療を長い期間受けたため、ついには親の遺産の都内のマンションまで手放したところで亡くなった。

治療後の副作用に苦しみながら続けたのは何故だったのだろうか。いずれも若い時から家族ぐるみのお付き合いだったから悲しかった。

ある会で100歳の元気な老人に会った。私の友人の父上である。30年以上前に彼女は若くしてがんで亡くなり、やつれた姿を見せたくないと見舞いを拒絶した。私の夫は1989年に多発性骨髄腫を発症し1994年に亡くなった。5年の生存は長いと言われた。もう20年も前のことで、その間に医学は確実に進歩し、特にがんに関しては一般人の意識も変わってきた。

その後、私も2つのがんに罹ったが、幸いなことに日常生活には何の支障もなく過ごしているのが不思議な程である。検査、早期発見だけが明暗を決めるとは思われない。それを運がよかったというのだろうか。

このようにがんはいつも自分の周囲で起きて避けて通れない。この上は「がんで死ぬのが一番」という説を肝に銘じておこう。

寿

「長命」と「長寿」は違う。長命は疾病を抱え、呻吟しながらもただ生きているということであり、長寿とは健康長寿を意味し、元気に社会に役立つような生活を送ることである。

長命と長寿の区別は日本語のなかにはあるが、英語での区別はない。辞書を調べる限りは両者ともにlong lifeとかlongevityと訳される。天寿はnatural lifeとか、natural deathとなってしまう。

漢字の「寿」に該当する喜びのニュアンスは英語にはどうも見つからないようだ。(小林 博)

スリランカから届いた笑顔



14年間に40回を超える渡航、しかも一つの国への渡航を想像してください。これは当セミナー小林理事長のスリランカへの渡航記録です。そして、この幾たびの渡航から新たな確信が生まれ出されました。

「途上国でのがん予防は生活習慣病対策から」そして「学校を変え、子供の健康行動を変え、そしてコミュニティーを、大人を変えてゆくべきだ」

この確信は財団の「学び」の結果のひとつでもあります。

2002年には財団のスリランカ・国家がん対策プログラムの一環として、コロボ市にて第1回の「がん対策セミナー」が開催され、いままでに4年毎に3回開催されました。このセミナーは、この二つの確信を実践につなぐ良いきっかけでもあったのです。

2004年、小林理事長のリーダーシップによって、学校保健に「がん」を含む生活習慣病対策を位置づけるモデルをスリランカで作ろうという事業案がまとまりました。この事業を国際協力機構(JICA)に提案したところ、「草の根技術協力プロジェクト」として採択され、2005年から3年間にわたり、スリランカの南部地域において、当財団が組織した日本、スリランカ合同チームにより実施されました。4つの小学校とその通学地域を対象として健康増進のための組織づくり、学校教育の環境改善、教師の訓練、教材開発、コミュニティーへのヘルスメッセージの発信等が行われました。

この事業は「学校の子供たちを主役として、地域保健活動を実施する」という新しいアプローチへの実験的な取り組みでもあったのです。事業の成果は2011年に「国際保健医療学会雑誌第25巻第4号」に英語で論文として掲載されています。(半田祐二郎)



子どもの力で「がん予防」 親を変え地域を変えた日本人医師のスリランカでの健康増進活動

小林博著(小学館101新書)

がん病理の世界的大家であられる著者が、一転、スリランカの農村に暮らす子ども達を相手に、健康増進活動を支援し続けた10年に亘る記録を綴られたものが本書である。小林先生をご存知の方なら、「へ?一体何故、病理学から公衆衛生へ」と思われる方も多いことであろう。しかし、本書を紐解くならば、スリランカの、しかも子ども達が生活習慣の改善に取り組むことの意義と重要性を、読者の誰もが大いに納得されるはずである。

人間はいずれ死ぬ。がんがあってもなくても必ず死ぬ。ならば、現実的ながん解決への道は、がんを予防することではないか。

そう考えた著者は、途上国でも生活習慣病が最も多いとされるスリランカを訪れ、大人を対象に噛みタバコによる口腔がんの予防活動を始められた。しかし、大人の意識を変えることの難しさに直面した。では、子ども達はどうかであろう。子どもは感性豊かで純真だし、素直に反応してくれるのではないか。

早速4つの学校を選び、子ども達の主体性を尊重した保健活動を始めてみたところ、見事に子どもたちは著者の思いに敏感に反応を示したのである。

しかも、子どもたち自身が変わったばかりでなく、著者の予想を超えて、学校が変わり、

親が変わり、地域までもが変わって行ったのである。

世界的に益々深刻化する生活習慣病。小林先生のがん予防にかける熱い情熱と、著者が発見した画期的な予防策へのヒントが本書には溢れている。是非、ご一読をお勧めしたい。

(順天堂大学医学部公衆衛生学准教授 湯浅資之)



「がん」と「感染症」からみた アジア人の「生と死」

小林 博著



ポリオワクチンを受けた子どもは左の小指に緑のインクをつけて目印とする(国際ロータリーのポリオ撲滅キャンペーンから)

はじめに

アジア諸国を歩き、アジア人の日常の営みを垣間見ながら、私が特に関心を抱いたのはその国の人々の「生き方」と「死に方」。とりわけ人間の「死のかたち」ともいうべきものについてであった。端的にいえば「アジアの人たちはどんな死因でその一生を終えるか」という問題である。

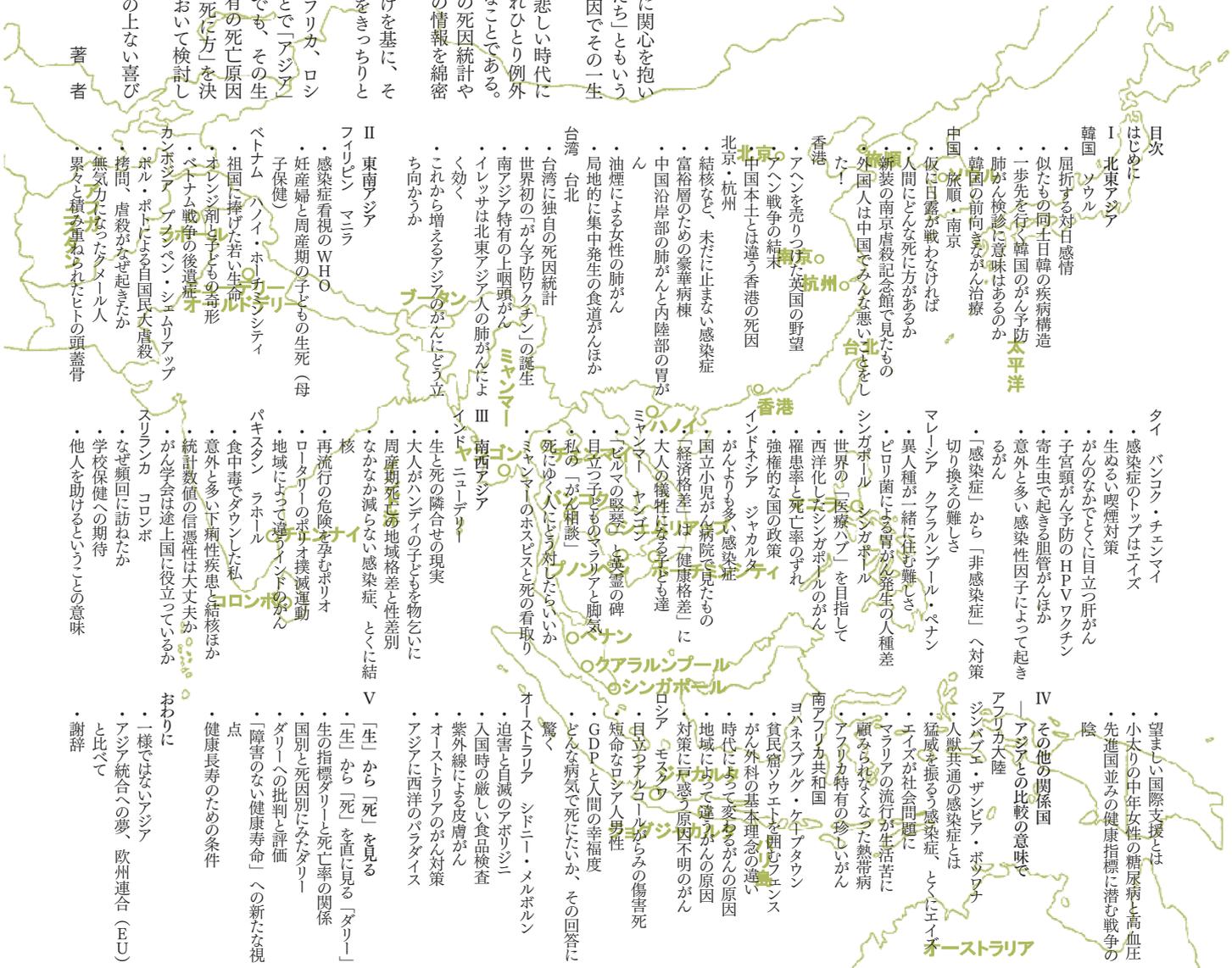
日本では東日本震災で膨大な数の方々が犠牲となられた。こんな悲しい時代に人間の死を考えるのは辛いことだが、いずれにしても人間は死ぬ。だれひとり例外はない。死と向き合い、死について考えることはどんな状況下でも大切なことである。私はアジア諸国を訪ねながら、一方においてWHO(世界保健機構)の死因統計や障害調整年数統計(略称ダリー)、さらにはUICC(国際対がん連合)の情報を綿密に考察し、私なりの推論をまとめてみた。

漠とした風評や過去のイメージに頼ることなく、確たる数字の裏付けを基に、それぞれの国の人達の「生死」という、人間としても根源的な問題をきっちりとしてえ直してみようと考えたのである。

本書はアジアを中心に纏めてみたものだがそれだけではなく広くアフリカ、ロシア、オーストラリアの国々をも含めてみた。これは互いを比較することで「アジア」がもつとよく見えてくると思つたからである。その結果、いずれの国でも、その生活レベルや生活習慣、そして食べ物、風土などの違いが、「生き方」が「死に方」を決定づけるのである。病気のなかではとくに「がん」と「感染症」に軸足を置いて検討してみた。

本書が読者にとって「アジア」と「アジア人」理解の一助になれば、この上ない喜びである。

著者



目次

I 北東アジア

- ・屈折する対日感情
- ・似たもの同士日韓の疾病構造
- ・一歩先を行く韓国のがん予防太平洋
- ・肺がん検診に意味はあるのか
- ・韓国の前向きながん治療
- 中国 旅順・南京
- ・仮に日露が戦わなければ
- ・人間にどんな死に方があるか
- ・韓装の南京虐殺記念館で見たもの
- ・外国人は中国でどんな悪い北を

II 東南アジア

- ・感染症看視のWHO
- ・妊産婦と周産期の子どもの生死(母子保健)
- ・祖国に捧げて若い生命
- ・ベトナム戦争の後遺症
- ・カンボジア フランベーン・シエムリアップ
- ・ボル・ポトによる自国民大虐殺
- ・拷問、虐殺がなぜ起きたか
- ・無気力になったタメール人
- ・累々と積み重ねられたヒトの頭蓋骨

III 南西アジア

- ・生と死の隣合せの現実
- ・大人がハンデいの子どもを物乞いに
- ・周産期死亡の地域格差と性差別
- ・なかなか減らない感染症、とくに結核
- ・再流行の危険を孕むポリオ
- ・ロータリーのがん撲滅運動
- ・地域によつて違うタイプのがん
- ・パキスタン ラホール
- ・意外と多い下痢性疾患と結核ほか
- ・統計数値の信憑性は大丈夫か
- ・がん学会は途上国に役立っているか
- スリランカ コロンボ
- ・なぜ頻回に訪ねたか
- ・学校保健への期待
- ・他人を助けるということの意味

IV その他の関係国

- ・望ましい国際支援とは
- ・小太りの中年女性の糖尿尿病と高血圧
- ・先進国並みの健康指標に潜む戦争の陰
- ・アジアとの比較の意味で
- ・アフリカ大陸
- ・ジンバブエ・サンビア・ボツワナ
- ・人獣共通の感染症とは
- ・猛威を振るう感染症、とくにエイズ
- ・エイズが社会問題に
- ・マリリアの流行が生活苦に
- ・顧みられなくなった熱帯病
- ・アフリカ特有の珍しいがん
- 南アフリカ共和国
- ・ヨハネスブルグ・ケープタウン
- ・貧民窟ワウエトを囲むフエンズ
- ・がん外科の基本理念の違い
- ・時代によつて変わるがんの原因
- ・地域によつて異なるがんの原因
- ・対策に戸惑う原因不明のがん
- ・目立つアルコールがらみの傷害死
- ・短命なロシア人男性
- ・GDPと人間の幸福度
- ・どんな病気で死にたいか、その回答に驚く
- オーストラリア シドニー・メルボルン
- ・迫害と自滅のアボリジニ
- ・入国時の厳しい食品検査
- ・紫外線による皮膚がん
- ・オーストラリアのがん対策
- ・アジアに西洋のパラダイス

V 「生」から「死」を見る

- ・「生」から「死」を直に見る「ダリー」
- ・生の指標ダリーと死亡率の関係
- ・国別と死因別にみたダリー
- ・ダリーへの批判と評価
- ・障害のない健康寿命への新たな視点
- 健康長寿のための条件
- ・一様ではないアジア
- ・アジア統合への夢、欧州連合(EU)と比べて
- ・謝辞

読者のみなさん
この書籍(公財・札幌がんセミナー発行 A5判変型、231頁)は公益財団法人札幌がんセミナーの海外調査研究事業の一端を紹介したものです。アジアの貧しい人達、とくにがんや感染症に苦しむ人達になにかしてあげたいとの気持ちで纏めたものです。入手ご希望の方は財団事務局にFAXでお申し込み下さい。寄附者のご好意で送料を含め無料でお届けいたします。

1) がん特別セミナー

一般市民に対するがんの啓発・予防活動の一環としてがんの各分野のエキスパート6人の講演を毎年4月の週末土曜を中心に毎週集中的に行っています。がんを知って「賢くなること」ががんから身を守る第一歩ともなります。

各演者約1時間のお話のあと30分の質疑応答をするようにしています。この自由な質疑応答によって市民のがんに対する理解は目立って改善されているのではないのでしょうか。

テーマはそれぞれの臓器がん、たとえば乳がん、肺がんなどの原因、診断、治療といった具体的な問題です。さらに、がんになったときお金はどのくらいかかるのか、がん

保険はどのように受けとめたらよいかという、お金に関わる現実的な問題にも関心がもたれるようになりましたね。

一方、がんになってどうしても助からないとわかったときはどうしたらよいか、緩和医療はどのような現状になっているかについても議論されます。

このセミナーは道新文化センターとの共催で、北海道文化放送uhb大学の協賛もいただいています。プログラムの作成、ならびに司会は(公財)札幌がんセミナーが担当し、PR並びに会場設営は道新文化センターの担当です。

今後ともこの市民との交流の場を介して、がんの解決に市民とともに努力していきたいと考えています。(小林 博)

発表の記事

がん特別セミナー2010

いま、あなたにとって「がん」はどのような存在ですか、まったく聞かれないと思っている方、少し不安を感じている方、今更けに思われている方、発症したのが再発の不安を感じている方、発症に気づいた方、おぼつかない方、日本の全癌で半数(年間)は約20万人ががんにかかっています。がんは、私達にとって一番身近な病といえます。

がん対策は常に進歩を遂げることからすべてが異なります。そのためにも、ひとりで多くの人々に参加していただき各専門の先生方と一緒に考えていくのがこのセミナーの趣意です。

昨年夏から2010年は、患者数が増えている肺や消化器のがん、また最新の放射線治療や、がんと感染症との関わり、末期がんにおける緩和療法など、さまざまな角度でがんと向き合います。「最新はなに?」「知ることは?」「考えること?」でがんと向き合う第一歩を踏み出しましょう。

第1回 4/10	感染症とがん がんは感染症が原因で起こることも多い病気です。	第2回 4/17	がんの緩和療法 末期がん患者の生活の質を向上させるための治療法です。
第3回 4/24	がんの放射線治療 がんを治療するための重要な治療法です。	第4回 5/15	消化器がんの化学療法 がんを治療するための重要な治療法です。
第5回 5/29	肺がん外科治療を中心に 肺がんを治療するための重要な治療法です。	第6回 6/5	「隠れている」ということ がんを治療するための重要な治療法です。

抗がん薬の起源は毒ガスです。1917年にドイツ軍が使用して以来、第一次世界大戦ではサルファーマスタードガスという毒ガスが実戦に用いられました。

この毒ガスがリンパ球の減少を来すことが分かり、サルファーマスタードガスから揮発性の少ないナイトロジェンマスタードが抗がん薬として開発されました。1942年にリンパ腫というリンパ球のがんの患者さんにナイトロジェンマスタードが投与されて、腫瘍縮小が得られたのが、臨床で抗がん薬が用いられた最初の例です。しかし、この情報は当時の軍事機密であり、公表されたのは1946年のことでした。(秋田弘俊)

「がん」になると大きな経済的負担がのしかかる。必要経費は日本医療政策機構の調査(2010年)によると年間133万円。就労も厳しくなる。

がんになった人の30%が退職。4%が解雇ということもあるらしい。がんになると経済的に生活困難となる。がん難民も生まれる。

(市民の声)

厚労省

「レバ刺し」禁止! それならタバコは?

がん特別セミナー2011

いま、あなたにとって「がん」はどのような存在ですか、まったく聞かれないと思っている方、少し不安を感じている方、今更けに思われている方、発症したのが再発の不安を感じている方、発症に気づいた方、おぼつかない方、日本の全癌で半数(年間)は約20万人ががんにかかっています。がんは、私達にとって一番身近な病といえます。

がん対策は常に進歩を遂げることからすべてが異なります。そのためにも、ひとりで多くの人々に参加していただき各専門の先生方と一緒に考えていくのがこのセミナーの趣意です。

昨年夏から2011年は、肺がんや乳がんの予防、緩和療法に関する最新がん、ワクチン予防、がんと感染症の関わり、がんと医療の関わりなどについて、最新の情報に基づいて、お話をさせていただきます。「最新はなに?」「知ることは?」「考えること?」でがんと向き合う第一歩を踏み出しましょう。

第1回 4/16	増えてきた前立腺がん 前立腺がんの予防と治療法についてお話をします。	第2回 5/7	死を看取る 死を看取るための準備と心構えについてお話をします。
第3回 5/21	どのような遺伝子があるのか がんの原因となる遺伝子についてお話をします。	第4回 6/4	胃がんと大腸がんの予防 胃がんと大腸がんの予防法についてお話をします。
第5回 6/11	がんのワクチン予防 がんを予防するためのワクチンについてお話をします。	第6回 6/18	がんセミナーハイパーシップ がんに関する最新情報を一挙に紹介します。

道新文化センター・公益財団法人札幌がんセミナー

がん特別セミナー2012

いま、あなたにとって「がん」はどのような存在ですか。
 まったく関わりないと思っている方、少し不安を感じている方、今まさに挑まれている方、
 克服したが再発の不安を感じている方、完全に克服した方、さまざまかと思えます。
 日本の全死亡者数(年間)の3割を越えるとも言われているがん。
 いま、私達にとって一番身近な病ともいえます。
 がん対策は常に新たな視点で考えることからすべてが始まります。
 そのためにも、各専門の先生方と一緒に考えていくのがこのセミナーの狙いです。
 今年で3年目となる2012年は、乳がんの予防や治療、肝炎・肝がんへの向き合い方、
 新たな視点として、がんとお金、がんと保険との関わり、
 また緩和医療の現状など、さまざまな角度でがんに向き合います。
 「継続は力なり」、「知ること」、「考えること」でがんに向き合う第一歩を踏み出しませんか。

第1回 13:00~14:20	4/7 土	第2回 14:30~15:50
乳がんのすべて 一予防から治療まで <small>札幌医科大学 医学部第一外科教授 平田 公一</small> 		肝炎、 肝がんはどう立ち向かうか <small>札幌厚生病院副院長 狩野 吉康</small> 
第3回 13:00~14:20	4/14 土	第4回 14:30~15:50
がん患者、 お金との関わり <small>札幌テレビ放送 報道制作局 報道部 勝馬 早苗</small> 		がん啓発と がん保険の社会的意義 <small>アフラック マーケティング企画部 マーケティング統括課長 石原 雅佳</small> 
第5回 13:00~14:20	4/28 土	第6回 14:30~15:50
緩和ケア その実践のイロハ <small>北海道医療大学 看護福祉学部 川村 三希子</small> 		緩和医療 一日本の現状と将来一 <small>医療法人 豊札幌病院理事長 石谷 邦彦</small> 
コーディネーター 北海道大学名誉教授 公益財団法人札幌がんセミナー理事長 医学博士 小林 博	時 間 13:00~15:50 (開場12:30)	受 講 料 4月(6回)5,040円 ※一括お申し込みのみ。
協 賛 北海道文化放送uhb大学	会 場 北海道医師会館8階(札幌市中央区大通西6丁目6)	

聴講者から質問・要望など

がん特別セミナー大変勉強になりました。次回も楽しみにしています。

外来で採血をして、病気は無いと医師に言われた時は、がんも無いと理解をして、良いのでしょうか。

北海道はがんの医療費も死亡率も高いとの事。予防を生活を見直さなければならないのに「スイーツ王国」などは自慢になるのでしょうか？

「腫瘍内科」とはどのようなことをする科なのか？ 具体的に知りたいです。

一番聞きたくて聞きにくかったガンとお金のこと、保健のことを聞いてよかったです。とてもよい企画だったと思います。今後もこういうことを聞ける機会を設けてほしいです。

尊厳ある人生の最期を迎えるために心の準備として「チャプレン」のお話しも聞きたいと思えます。

乳癌の手術後のリンパマッサージについて知りたいです。どうしてむくみがおこるのか？ おこる人とおこらない人の違いは何ですか？

2) がん相談

がんの患者さんやそのご家族の方のための「がん相談室」では、これまでに1,000件を超える相談を受けています。このコーナーでは、がん相談室の活動や実際に相談室をご利用いただいた方から寄せられた声を紹介いたします。

どんな相談がありましたか？

あるご婦人からの相談

ある日憔悴しきった初老のご婦人が見えられた。
「某病院で卵巣がんの手術をしたのですが、再発したらしく、いま化学療法を受けているのです。ところがこれが大変辛くて、できれば薬は止めたいのですが、どうしたらいいでしょうか？」とのことだった。
「化学療法はがん治療に必要なものですが、もし本当に辛いと思うのなら止めてほしい、と先生にはっきりお願いしたらどうですか？」とお話したところ、「先生にそのようなことをいえる雰囲気ではありません。これがベストだからそうしなさいといわれるので、それに従っているのです。ところが、これが死ぬほど辛くて……。できれば止めたいのです」というのである。
「化学療法を受けるかどうかを決めるのは、最終的には貴女自身の決断なのです。だから自分が薬を止めたいというなら先生にはっきりそうお願いしてごらんください」と励ましました。なんとか納得していただいたようで「そう

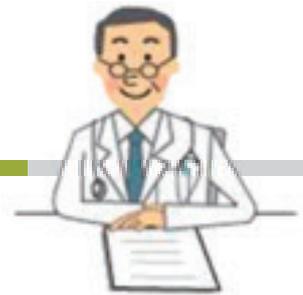
ですね、先生にはっきりお願いしてみます！」と帰っていった。

1、2か月して同じご婦人がまた見えられた。

以前よりもっとやつれた様子である。「先生に薬を止めてほしいとお願いしました。ところが先生に「私のいうことを聞けないの？ そんなことで薬を止めたら死んでしまうよ。死んでもいいの！」と叱られてしまいました。

そこで止むなくまた薬の注射を受けたのですが、もうどうにも辛くて……」という声はほとんど聞こえなかった。

(岩波書店「がんに挑む がんに学ぶ」から一部抜粋)



患者さんの声

がん検診の大切さを痛感！

13年前に左肺下葉に径3cm程の腺癌が見つかり下葉全摘出。以来年に一度胸腹部の検診を受診。昨年10月に腹部エコーで、右腎臓に径3cm程の腫瘍らしき物が有るとの診断。そこで、どのような処置を受けるべきかを、がんセミナーの小林博先生に相談しました。

私は札幌斗南病院の清水先生が実施している凍結手術を希望し受診した結果、腫瘍が腸管に接していて凍結手術は不可能との診断。そこで内視鏡での摘出を希望し、小林先生から北海道がんセンターに紹介戴きました。



そうして、この2月2日に腹部に4箇所小孔を穿つての内視鏡での癌摘出手術を受け、無事に癌は摘出。癌は明細胞型腎癌で悪性度は1~2、転移のリスクは5%との診断。以来2か月半経過した現在は体力気力とも、術前状態に回復。私の希望をくんでの適切な助言と具体的な対応に感謝しつつ、病の早期発見・早期治療の必要性とその大事さを感じ入っている次第です。

(北海道野生動物研究所所長、門崎允昭、73歳)

がん相談室のご利用方法

予め電話で日時の予約確認ののち、財団事務所に来ていただく方式です。

1件あたり30分から1時間余の面接を現在も無料で行っています。

TEL 011-222-1506

毎週月～金曜日 10:00～16:30

がんに関心の方々、そのご家族のご来訪をお待ち致しております。

どんな治療が行われているか

私どもががん研究を始めた50年前は「がん＝死」で、もし治る人がいたら奇跡とまでいわれた。いまがんは半分以上の人がたすかるのだから、これだけでも世の中大きく変わったものである。なぜこんなに治るようになったのだろうか？ 医学・医療が進んだからといえばそれまでだが、一番大きな理由は何かといっても治りのいい早期のがんが見つかるようになったか

らである。

早期がんはなぜ治りがいいかというと、がんが小さいから手術でとり易いこともあるが、それだけではない。もっと大事なことは早期のがんはまだ十分に悪性化していないため転移の心配がないからである。このような早期のがんが多く見つかるようになったのは国民のがんへの関心が高まり早く病院で検査を受けるようになったこともあるし、また診断のため検査技術が急速に進歩してきたからでもある。(小林 博)

がんはあってもいい？

「がん相談」でいつもぶちあたる壁がある。とりきれない不治のがんをどうしたらいいかというときである。がんはならないに越したことはないし、がんになってもうまく治ればこんな素晴らしいことはない。だが、不運にもがんで命を落とす人も少なくない。

それではがんをとりきれないとわかったときはどうしたらよいのだろうか？ 結局はがんはあってもよい、というよりがんはあっても止むを得ないと思わざるを得なくなってしまう。

医学はずいぶん進んだ。医学の教科書を読んでいると大半

の病気の原因がわかるし、どのように診断し治療していったらよいかも克明に書かれている。ところが、病気が治し切れないとわかったとき、たとえば不治のがんになったときに患者はどうしたらいいかというような、患者にとって深刻で、もっとも知りたい大切なことはあまり書かれていない。これでは真の医学とは言えない。

端的に言って、治すことだけに腐心したかつての「驕れる医学」からいま死を見つめる生身の人間をみる「謙虚な医学」が求められている。つまりこれからは「対決の医学」だけではなく「対話の医学」への拡大が望まれているように思う。

(小林 博)

寅さんは肺がん？

寅さんは肺がんで亡くなったといわれるが本当の病名は肝臓がん。肝臓がんが肺に転移したので「肺にがんがあるから肺がん」とメディアが間違ってしまった。がんがどこに転

移(飛び火)しても原発(火もと)の病名が正しい。だから寅さんの死因はあくまで肝がんなのである。よく間違われてしまう。(小林 博)



自らのがん経験から教わる

私は自らのがん経験を踏まえ、そのあとの人生はすべてもうけものと思っている。ただ勝手に「もうけた」と思ってはいけない、なにかこの世にお返しをしなければいけない。そのため何をしなければならぬかといういろいろ考えた。いろいろあり過ぎて考えはまとまらなかった。

そのうち私は残された自分の生命は「あと1、2か月しかない」と思うことから始めようと思うようになった。そうするといま自分は何をしなければならぬかに気づくようになるのではないか？ いままで大切だと思っていたことがそうでもなくなった

り、逆に小さなことのなかに非常に大切なものがあることにも気付く。そういうことを期待したからである。

要するに「あと1、2か月」というのは「グズグズしていると生きているうちにやらねばならぬ大切なこと、大袈裟に言うところの世への恩返しをやらずに終わってしまうぞ、そうすると大きな心残りになるぞ」という自分への警鐘でもあった。

何かせつつかれるような気がしなくてもないし、周辺の人、とくに家内から「どうしてそんなに急ぐの」といわれ、それもそうだなと思ったり、迷いは尽きない。とにかく時間は大事に使いたいものだ。(小林 博)

どんな治療を受けたらよいか

がんが診断されてもすぐあきらめる必要はなくなった。それぞれがん専門の外科医を紹介してもらい手術摘出を受けることが第一歩である。

手術の後、病期(がんの広がり)が診断される。I期の早期であれば、そのまま経過観察として様子を見ても大丈夫である。III期以降の進行がんが診断された場合、がんの再発を予防するために補助療法が必要になる。

問題になるのは、早期がんでもII期と診断された場合。その場合にはかなり確率は低い再発する可能性があるため、医師は補助療法を勧めるのが一般的である。しかし、治療を

受けるかは患者さんの選択である。その選択のために、それぞれの治療の特性の理解が必要である。化学療法や放射線療法はかなりの副作用を伴うので、補助療法を受ける前に患者さんは、主治医とよく話し合うことが必要。主治医は病期ごとに化学療法をしない場合とした場合の再発率を示してくれる。

年齢によっても病状の進行は変わってくる。40歳代、50歳代のがんは進行が速いが化学療法に感受性が高いので、つらい副作用に耐えて化学療法を受けるべきであろう。しかし、再発のリスクの低い場合や高齢者では化学療法を受けずに経過を見てもらう選択もある。解らないことは解るようになるまで医師と話し合ってから、治療法を選択することも肝心である。(細川眞澄男)

北海道のがん診療連携拠点病院紹介



このコーナーでは、道内のがん診療連携拠点病院をとりあげ、各病院の特色や力を入れている分野について紹介していきます。第1回目は「北海道がんセンター」です。

西尾 正道
北海道がんセンター 院長

がん治療は最初の治療が明暗を分ける疾患です。再発や転移が生じれば救命できないことが多いため、最初の最適な治療が重要であります。

現在、道内にはがんの専門的な医療を提供できる「がん診療連携拠点病院」として厚労省より指定を受けているのは21施設です。その中でも各都道府県で中心的な役割を担う施設として

当院は「都道府県がん診療連携拠点病院」に指定され、北海道内のがん診療において、中心的・先導的な役割を担っています。

外科系・内科系のがん治療専門医はもとより、放射線治療の専門医が4名も在籍しており、日本で5指に入る症例数の治療を行っています。また臨床研究部、薬剤部・看護部などのスタッフの研修にも力を入れています。

さらに「かん相談・支援・情報室」の充実や患者活動の場として「ひだまりサロン」の設置など、がん診療に必要な総合的な視点から施設運営を行っています。最善のがん治療を提供すべく、誠意と熱意を持って院内の職員が一丸となっています。



(住所) 札幌市菊水4条2丁目3番54号
(電話) 011-811-9111(代表)



(地下鉄) 地下鉄東西線「菊水駅」下車 3番出口より徒歩3分
(自動車) 駐車場は台数に限りがあります

北海道内のがん診療連携拠点病院

種別	病院名	郵便番号	住所	電話番号(代表)	FAX番号(代表)	e-mail(代表)	HPアドレス	所属2次医療圏
都道府県	独立行政法人国立病院機構 北海道がんセンター	003-0804	札幌市白石区菊水4条2-3-54	011-811-9111	011-832-0652	nohara@sap-cc.go.jp	www.sap-cc.org/	札幌
地域	市立札幌病院	060-8604	札幌市中央区北11条西13-1-1	011-726-2211	011-726-7912	-	www.city.sapporo.jp/hospital/	札幌
地域	砂川市立病院	073-0196	砂川市西4条北3-1-1	0125-54-2131	0125-54-0101	info@med.sunagawa.hokkaido.jp	www.med.sunagawa.hokkaido.jp	中空知
地域	医療法人王子総合病院	053-8506	苫小牧市若草町3-4-8	0144-32-8111	0144-32-7119	maw01@ojihosp2.jp	www.ojihosp.or.jp/	東胆振
地域	北見赤十字病院	090-8666	北見市北6条東2-1	0157-24-3115	0157-22-3339	ktmnsk@kitami.jrc.or.jp	www.kitami.jrc.or.jp/	北網
地域	JA北海道厚生連 帯広厚生病院	080-0016	帯広市西6条南8-1	0155-24-4161	0155-25-7851	-	www.dou-kouseiren.com/byouin/obihoro/	十勝
地域	JA北海道厚生連 旭川厚生病院	078-8211	旭川市1条通24-111-3	0166-33-7171	0166-33-6075	ganrenkei.ASA@ja-hokkadoukouseiren.or.jp	www.dou-kouseiren.com/byouin/asahikawa/	上川中部
地域	市立釧路総合病院	085-0822	釧路市春湖台1-12	0154-41-6121	0154-41-4080	kh530204@kushiro-cghp.jp	www.kushiro-cghp.jp/	釧路
地域	市立函館病院	041-8680	函館市港町1-10-1	0138-43-2000	0138-43-4434	hnh@hospital.hakodate.hokkaido.jp	www.hospital.hakodate.hokkaido.jp/	南渡島
地域	社会医療法人母恋 日鋼記念病院	051-8501	室蘭市新富町1-5-13	0143-24-1331	0143-22-5296	contact@nikko-kinen.or.jp	www.nikko-kinen.or.jp/	西胆振
地域	社会福祉法人函館厚生院 函館五稜郭病院	040-8611	函館市五稜郭町38-3	0138-51-2295	0138-56-2695	-	www.goby.com/	南渡島
地域	札幌医科大学附属病院	060-8543	札幌市中央区南1条西16-291	011-611-2111	011-621-8059	narita.j@sapmed.ac.jp	web.sapmed.ac.jp/hospital/	札幌
地域	JA北海道厚生連 札幌厚生病院	060-0033	札幌市中央区北3条東8-5	011-261-5331	011-271-5320	websup.sap@ja-hokkadoukouseiren.or.jp	www.dou-kouseiren.com/byouin/sapporo/	札幌
地域	北海道大学病院	060-8648	札幌市北区北14条西5丁目	011-716-1161	011-706-7627	mhp-webmaster@huhp.hokudai.ac.jp	www.huhp.hokudai.ac.jp	札幌
地域	医療法人 深仁会 手稲深仁会病院	006-8555	札幌市手稲区前田1条12-1-40	011-681-8111	011-685-2998	teine@keijinkai.or.jp	www.keijinkai.com/teine/	札幌
地域	旭川医科大学病院	078-8510	旭川市緑が丘東2条1-1-1	0166-65-2111	0166-65-6114	iji-iji@jim.asahikawa-med.ac.jp	i-shien@jim.asahikawa-med.ac.jp	上川中部
地域	市立旭川病院	070-8610	旭川市金星町1-1-65	0166-24-3181	0166-24-1125	p-hospital@city.asahikawa.hokkaido.jp	www.city.asahikawa.hokkaido.jp/files/hospital	上川中部
地域	独立行政法人労働者健康福祉機構 釧路労災病院	085-8533	釧路市中園町13-23	0154-22-7191	0154-25-7308	shomukaty@kushiroh.rofuku.go.jp	www.kushiroh.rofuku.go.jp	釧路
地域	社会医療法人 恵佑会 札幌病院	003-0027	札幌市白石区本通14丁目北1-1	011-863-2101	011-864-1032	kwamura@keiyukaisapporo.or.jp	www.keiyukaisapporo.or.jp	札幌
地域	KKR札幌医療センター	062-0931	札幌市豊平区平岸1条6-3-40	011-822-1811	011-841-4572	kohnan-m@kk-smc.com	www.kkr-smc.com	札幌
地域	独立行政法人国立病院機構 函館病院	041-8512	函館市川原町18-16	0138-51-6281	0138-51-6288	1105iy01@hosp.go.jp	hnh-hosp.jp/	南渡島

お陰さまで(公財)札幌がんセミナーのご趣旨にご賛同をいただき多額のご寄附を頂戴いたしております。「感謝」の一語あるのみです。ご寄附をお願いの趣旨は下記のとおりあります。

ご寄附お願いの趣旨

拝啓

早速でございますが、医学をはじめとする近年の科学技術の進展、それに伴う科学情報の利用拡大は目覚ましく、誠に喜ばしいことではありますが、一方で「がん」は人間の高齢化とともに益々人々を脅かす重大な疾患になっています。

「札幌がんセミナー」は内閣府所管の公益財団法人として「がん」と闘う研究基盤の充実と進展に貢献することを目標に、国際的な学術会議の開催を中心とした各種事業を展開して参りました。

そこで当財団では、さらに充実した諸事業を一層円滑に実施するために、より多くの方々に財団運営にご協力いただくことを目的として、ご寄附をお受けすることに致しました。私達の活動にご理解、ご協力をいただけますれば、大変嬉しく存ずる次第であります。

不躰なお願いかと存じますが、お申し込みをいただければ誠に光栄でございます。なにとぞよろしくお願い申し上げます。

敬具

ご寄附に対するお礼

次頁にありますようなご寄附をいただいた方々のお名前を拝見致しますと、法人では大部分が医療に関わる関係の方々でございます。

(株)インファーマシーズ(大谷喜一社長)、(株)玄米酵素(岩崎輝明社長)、(株)モロオ(師尾仁社長)、(株)ムトウ(田尾延幸社長)、アイ・ウィミズクリニック(石川睦男院長)のご理解、ご支援を頂戴致しました。

ところが医療とは直接関係のない市民組織からも多くのご寄附をいただきました。

たとえば札幌中央アーバン(株)(光地勇一社長)、(株)ビクトリア観光(松谷明良社長)、(株)セイコーマート(丸谷智保社長)、札幌商工会議所(高向巖会頭)、六花亭製菓(株)(小田豊社長)などのご協賛は本当に嬉しく存ずる次第であります。

本財団はがん研究に限らず、がんで悩む人達、またがんに悩むかもしれない人達の悩みを先取りし、啓発・予防にも目を向けております。その意味で私達財団活動は医療関係にとどまるものではなく、ひろく一般市民とともに歩む存在になってきております。この意味でも一般市民の方々からのご支援はことのほか嬉しく存ずる次第であります。

また指定寄附といわれるものに(株)玄米酵素、また基本財産への寄附に北海道郵便通送(株)(加藤欽也社長)、恵佑会札幌病院(細川正夫理事長)、アステラス製薬(株)、旭エンジニアリング(株)(星野恭亮社長)、後藤田医院(後藤田栄貴理事長・院長)からいただきました。いずれも心から厚く御礼申し上げます。

ご寄附は有効に使わせていただきます。当財団の理事長ほか役員はすべて無報酬です。公益財団の名前に恥じないように、その用途についても会計監査の方々の厳正なチェックを受けております。内閣府所管の公益財団として北海道内にとどまらず、全国、そして世界の多くの人達の悩むがんとに関わり合いを持ち続けたいと念じております。皆様のご理解、ご支援に改めて心から感謝申し上げます。

ご寄附に感謝!! (2010年11月25日～2012年6月15日)

公益財団法人認可の2010年11月25日以降2012年6月15日までにご寄附のうえスポンサーになっていただいた下記の方々のお名前を紹介させていただきます。ここにあらためて心から厚く御礼申し上げます。

わたし達は「がん」の問題を解決するため様々な活動をしている公益財団法人「札幌がんセミナー」を応援しております。

A. 運営寄附

道内法人

(株)アインファーマシーズ
(株)玄米酵素
(株)モロオ
札幌中央アーバン(株)
(株)ビクトリア観光
(株)セイコーマート
札幌商工会議所
(株)ムトウ
六花亭製菓(株)
アイ・ウィミンズクリニック

道外法人

大鵬薬品工業(株)
田辺三菱製薬(株)
栄新薬(株)
エーザイ(株)札幌CO
(株)ヤクルト本社
(株)大塚製薬工場
ノバルティスファーマ(株)
武田薬品工業(株)
(株)ツムラ
セルジーン(株)
日本イーライリリー(株)
MSD(株)
アボットジャパン(株)
第一三共(株)

個人

高橋 隆司
細川 眞澄男
山田 雄次
藤本 征一郎
福田 守道
谷口 直之
小林 正伸
石林 清
武市 寿美代
岩谷 邦夫
大塚 榮子
半田 貴志子
小林 博

B. 指定寄附

法人

(株)玄米酵素(人件費補助)

個人

小林 博(図書刊行、人件費補助)

C. 基金寄附

法人

北海道郵便通送(株)
恵佑会札幌病院(開院30周年記念)
アステラス製薬(株)
旭エンジニアリング(株)
後藤田医院(開院20周年記念)

個人

賀来 亨
土産田 照夫
半田 祐二朗
矢野目 雅子

財団基金へのご寄附とは別に、その年ごとのがんシンポジウム開催に対しても、多数の団体よりご寄附をいただいております。この場を借りまして、深くお礼申し上げます。なお財団設立のあと2010年11月24日まで多くの方々のご寄附をいただきましたが、そのご芳名は省略させていただきます。

ご寄附の種類

寄附は3種類あります(ご寄附は税控除の対象となります)。

- A. 運営寄附 個人、法人問わずいただくご寄附はその年度内に使用させていただきます。なお、こちらは毎年定期的にご寄附いただくことを前提と致します。
- B. 指定寄附 用途指定の寄附です。いただきます寄附金の用途を予め指定いただきます。
- C. 基金寄附 基金のための寄附です。頂戴した寄附はセミナー基金のなかに組み入れ、直接使用することはありません。基金から生み出であろう利息のみを使わせていただきます。

以上のA、B、Cの3種のご寄附はいずれも銀行、あるいは郵便局で振込み可能です。

会計年度は4月1日から翌年3月31日までとなっております。



メジャードナー(大口寄附者)の方々に感謝をもってご紹介いたします

北海道から沖縄まで、調剤薬局の「アイン薬局」と都市型ドラッグストアの「アインズ&トルペ」を中心に現在、563店舗全国展開しています

(株)アインファーマシーズ

住所：札幌市東区東苗穂5条1丁目2-1
t e l：011-783-0189
社長：大谷 喜一

健康長寿を願う人達のためにみんなと
共に歩む会社です

(株)玄米酵素

住所：札幌市北区北12条西1丁目1-1
t e l：011-736-2345
会長：岩崎 輝明

医療現場の求める医薬品をお届けする
信頼される会社です

(株)モロオ

住所：札幌市中央区北3条西15丁目1-50
t e l：011-618-2323
社長：師尾 仁

利益は社会にお戻しすることをモットー
と考えている会社です

札幌中央アーバン(株)

住所：札幌市中央区南3条西4丁目
t e l：011-221-2534
社長：光地 勇一

郵便物を間違いなくお届けする仕事は
結構大変なものです。がん患者さんの
幸せを願って

北海道郵便通送(株)

住所：札幌市東区北8条東1丁目2-1
t e l：011-731-6131
社長：加藤 欽也

開院20年を記念して(公財)札幌がんセ
ミナーに寄附させていただくことに致
しました。「がん」の問題解決を祈って

医療法人社団 後藤田医院

住所：札幌市西区西野3条9丁目10-37
t e l：011-663-8170
理事長・院長：後藤田 栄貴

ご寄附の方法

出来ましたら、下記当セミナー事務局まで、事前にご寄附の旨をご連絡いただければ幸いに存じます。法人は1口5万円以上です。そのあと下記口座への振込をお願い申し上げます。

(ご連絡先) 札幌がんセミナー事務局

TEL(011)222-1506、FAX(011)222-1526
Email：scs-hk@phoenix-c.or.jp

振込口座：

北洋銀行 札幌営業部 普通口座 0645472

ゆうちょ銀行

北海道銀行 本店営業部 普通口座 0200230

口座番号：02730-8-98355

名義：公益財団法人札幌がんセミナー 理事長 小林 博

加入者名：公益財団法人札幌がんセミナー

公益財団法人 札幌がんセミナー 役員名簿

(五十音順、敬称略)

《評議員》

福田 守道	議長	札幌医科大学名誉教授	理事は業務を執行し、評議員・評議員会は理事会を監督する役割を担います
石林 清	副議長	北海道教育文化協会顧問	
仙道富士郎	副議長	山形大学名誉教授、同大学前学長	
長瀬 清	副議長	北海道医師会会長、北海道がん対策推進協議会会長	

顧問の方々のお名前は省略させていただきます

石川 睦男	アイ・ウィミズクリニック理事長・院長、旭川医科大学名誉教授	出村知佳子	(株)グンテック専務取締役
猪俣 幸子	裏千家茶道正教授、裏千家インターナショナル会員	土橋 信男	北星学園理事長、函館大学教授、元札幌市教育長
岩崎 輝明	一般財団法人 食と健康財団理事長、日本総合医学会理事長、(株)玄米酵素会長	中村 恵子	札幌市立大学副学長、同大学看護学部長
及川 恒之	北海道医療大学心理学部言語聴覚療法学科教授	新川 詔夫	北海道医療大学学長、長崎大学名誉教授
大塚 榮子	産業技術総合研究所名誉フェロー、北海道大学名誉教授	西村 昭男	アグリエ工房イタンキ(株)代表取締役
加藤 欽也	昭和交通(株)代表取締役社長、(社)北海道ハイヤー協会会長、在札幌スウェーデン名誉領事	丹羽 祐而	(株)丹羽企画研究所代表取締役、元札幌市教育委員会委員長
金井 重博	富士メガネ名誉会長、中央大学同窓会副会長	野口 昌幸	北海道大学遺伝子病制御研究所教授
後藤田栄貴	後藤田医院院長、北大ラ・カンツェロ会会長	秦 温信	札幌社会保険総合病院名誉院長
小林 正伸	北海道医療大学看護福祉学部看護学科教授	畠山 昌則	東京大学医学部微生物学講座教授
白土 博樹	北海道大学大学院医学研究科放射線医学分野教授	日浅 尚子	(株)北海道新聞社マーケティングセンター長
須賀 俊博	豊和会札幌病院理事長・名誉院長、JA北海道厚生連札幌厚生病院名誉院長	樋口 晶文	札幌市医師会副会長、市立札幌病院副院長
杉下 清次	杉下清次公認会計士事務所所長	藤本征一郎	医療法人愛全会愛全病院院長、北海道大学名誉教授
高田 賢蔵	(株)イーベック代表取締役会長、北海道大学名誉教授	星野 恭亮	札幌商工会議所副会頭、旭イノベックス(株)代表取締役
武市寿美代	がん患者家族代表、主婦	守内 哲也	北海道大学名誉教授
田中 宏	田中宏法律事務所所長、元日弁連副会長	山下 幸紀	札幌複十字総合健診センター所長、北海道がんセンター名誉院長
土田 保穂	土田企画(株)代表取締役	山下 徹郎	恵佑会札幌病院上席副院長
		山田 雄次	(株)アネロファーマサイエンス
		吉田 晃敏	旭川医科大学学長
		和田 壬三	和田法律事務所所長

《理事》

小林 博	理事長	北海道大学名誉教授
高橋 隆司	副理事長	北洋銀行元副頭取
細川眞澄男	副理事長	北海道大学名誉教授

《監事》

関川 峰希	(株)北洋銀行常務取締役
樋爪 昌之	樋爪公認会計士事務所所長

秋田 弘俊	北海道大学大学院医学研究科腫瘍内科学分野教授
浅香 正博	北海道大学大学院医学研究科がん予防内科学特任教授
岡田 太	鳥取大学医学部病態生化学教授
高後 裕	旭川医科大学医学部内科学教授
光地 勇一	札幌中央アーバン(株)代表取締役社長
佐藤 昇志	札幌医科大学病理学第一講座教授、日本癌学会会長(2012)
谷口 直之	理化学研究所基幹研究所システム糖鎖生物学研究グループディレクター、大阪大学名誉教授
千葉 逸朗	北海道医療大学歯学部保健衛生学教授
西尾 正道	独立行政法人国立病院機構北海道がんセンター院長
浜田 淳一	北海道大学遺伝子病制御研究所准教授
半田祐二郎	北海道医療大学教育開発センター、国際保健学教授
平田 公一	札幌医科大学外科学第一講座教授
細川 正夫	恵佑会札幌病院理事長

《役割分担》

・国際がんシンポジウム	佐藤 昇志 (プログラム委員長)
・冬季がんセミナー	細川 正夫 (プログラム委員長)
・海外調査研究	半田祐二郎、谷口 直之、小林 博
・啓発・予防がん相談	浅香 正博、西尾 正道、秋田 弘俊 小林 博
・広報SCSコミュニケーションホームページ	細川眞澄男、秋田 弘俊、浜田 淳一 半田祐二郎、小林 博、ニコルス ピーター 千葉 逸朗、岡田 太
・財務募金	高橋 隆司、光地 勇一 光地 勇一、高橋 隆司、浅香 正博 平田 公一、高後 裕、細川 正夫
・事務局	及川 智江、大橋 泰子

事務局紹介

当財団の事務局は札幌市のランドマークである大通にあります。それも大通公園というランドマーク中のランドマークを望む、北海道医師会館の6階です。札幌の地理に詳しい方には説明の必要はないのですが、あえて申し上げますと、便利で快適な場所にあります。地下鉄「大通駅」西口一番出口をでて、さらに歩道を西側に2ブロック歩けば、3-5分で到着と相成ります。



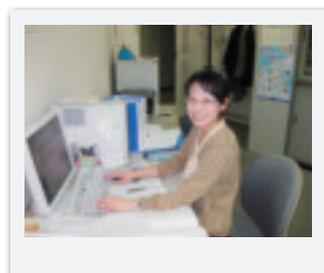
事務所のドアが執務時間中に閉じてあるのを筆者はみたことがありません。そのことには、財団は人々を歓迎するという、執務中の小林博理事長とロジスティックスと各種コーディネーション業務を一人でこなす及川智江職員にはドアを開け閉めする暇がないということの2つの意味があるようです。この事務所には中で執務する人的資源以外には、贅沢な資産は見当たりません。しかしながら、そこには先取の気質、迅速を旨とする業務体制が根付いています。

ここにはお客様や事業に関係する人々の訪問がたえません。

また、がん相談も、この事務所で相談者のプライバシーに配慮しながら、小林博理事長によって行われています。

訪れば、ゆったりとソファーに座をすすめられ、その瞬間から、この事務所の一部として室内の風景に溶け込むのです。適切な距離感のもとに、内外をあまり区別しないこの事務所の在り様は、財団そのものであり、夏と冬に毎年実施される学術集会、そして社会貢献事業の理念を体現しているといえないでしょうか。

皆様ぜひお立ち寄りください。事務所は原則として月曜から金曜の間、朝9時から夕方5時半までフル稼働しております。(半田祐二郎)



編集後記

この「SCSコミュニケーション」は公益財団法人(内閣府所管)札幌がんセミナーと皆様をつなぐメッセージです。そして私ども編集担当者は、多くの人々がこのコミュニケーションを通じて、これから先のことを考え予見してゆくための案内役といったところでしょうか。2012年6月の創刊のち、毎年2回のペースで皆さまと紙上でお目にかかります。

がん研究・がん対策は、両分野を生業とする者にとっては身近で具体的な事ですが、私のごとく素人には、複雑で難しい分野に思えます。つい素人は悩まずに先生方のおっしゃる通りにすればよいと考えてしまうのです。

かく言う私は開発途上国の病院経営管理、医療サービスの質の向上という分野で働く者ですが、保健・医療に携わる者にとっても「ガンは怖い」という思いをぬぐい去ることはできません。怖いながらも、私はがんを少しでも知り、できる範囲でそれと戦い、しかし一方ではそれを受け入れるという境地に達したいと、思っているのです。

SCSコミュニケーションのタイトル「The Way Forward」【これからの道】とはまさしく人々とのコミュニケーション、種々の体験、学びを介して近未来のことを一人一人の立場で考え抜くためのキーワードです。

「がん」について専門家が研究したり考えたりすることも、素人としての一般市民が「健康」について考え行動することも、広くとらえれば、同等の価値があるのではないのでしょうか。我々の「健康」についての近未来、札幌、北海道を含む日本の近未来、さらにはアジアそしてこの世界の近未来を、一人一人が考え、行動してまいりましょう。

公益財団法人(内閣府所管)札幌がんセミナーは、常に皆様とともに存在しています。多くの研究者・医療者とともに、一般市民の皆様の視線を大事にしながら、がん研究・がん対策について幅広く考え、行動してゆく組織であろうと日々努めています。

「SCSコミュニケーション」を創刊するにあたり、私ども編集担当者は多くの人々にお世話になりました。

本紙面にて略儀ながら御礼申し上げます。

そして今後ともご支援いただきますようよろしくお願いいたします。

半田 祐二郎
編集代表

北海道医療大学・大学教育開発センター・教授(国際保健学)





札幌がんセミナー シンボル絵画について

金井英明さんの作品です。
金井さんは絵画の作家として著名な方です。作品が日本郵便の切手に採用されたことがあります。
2001年1月、札幌がんセミナーのシンボル・イラストレーションとして使用できる絵を描いていただきたいとお願いしましたところ、ご快諾をいただき、パテント料を含む一式を、通常考えられない安価な費用にて提供して下さいました。金井さんの好意と友情に改めて感謝です。
当財団はがんに関わる夏と冬のセミナーを長年継続してい

ますが、海外調査研究も行っております。
また常に一般市民の健康的な暮らしのお役に立つ活動も実践しております。がん相談や市民啓発のための特別セミナーなどはその狙いに行っております。
当財団は自然環境に優れた北海道、都市機能の快適な札幌をベースに、人々の健康増進に高い関心を抱きつつ、公益的役割を果たしております。
この絵画には以上のようなイメージが北海道大学のキャンパスをバックに描かれています。

SCS コミュニケーション

The Way Forward

Communication with the Sapporo Cancer Seminar Foundation

公益財団法人(内閣府所管)札幌がんセミナーSCSコミュニケーション no.1
発行日：2012年6月15日



発行：
(公財)札幌がんセミナー

〒060-0042 札幌市中央区大通西6丁目 北海道医師会館6階
TEL：011-222-1506 FAX：011-222-1526
E-mail：scs-hk@phoenix-c.or.jp HP：http://scsf.info

広報委員：秋田 弘俊、岡田 太、千葉 逸朗（ホームページ担当）、ニコルス ピーター、
浜田 淳一、半田 祐二郎（SCSコミュニケーション編集代表）、細川 眞澄男（委員長）
デザイン・レイアウト：山本 記代美
印刷・製本：株式会社アイワード（コーディネーター：松木 新）